新制女子國語讀本

新教授要目準據

卷七

J759
An4
資料室

42438
教科書文庫
4
810
42-1938
200030
1746
s.13.
1938.

資料室

375.9
A114

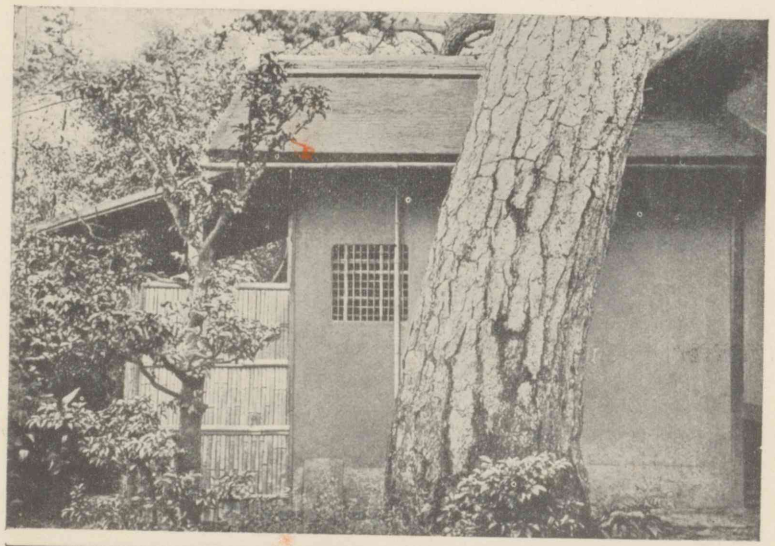
昭和十三年一月二十六日
文部省檢定濟
高等女學校國語科用

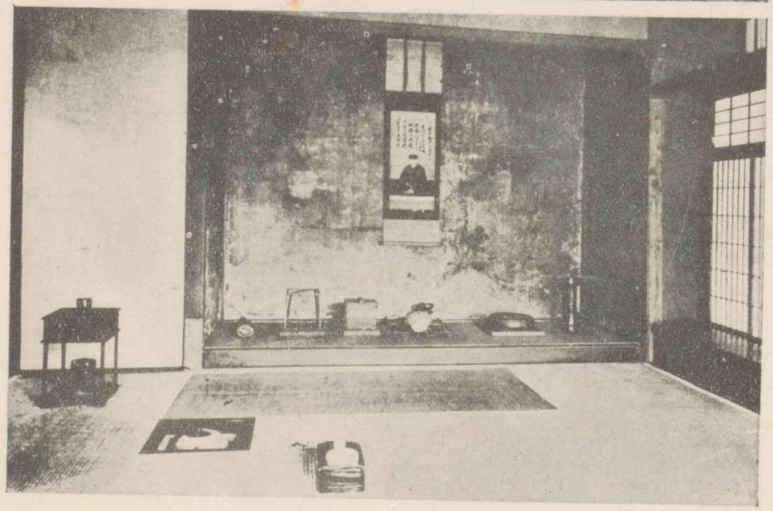
新制女子國語讀本 卷七

新教授要目準據

臺北帝國大學教授 安藤正次
學習院教授 東條操 共編

東京
大阪 三省堂





（部內圖下・部外圖上）室茶の庵喜妙

（第二課參照）

廣島大學圖書之印

廣島大學
教
39117
圖書

卷七目次

一　風雅論　徳冨蘇峰　一
二　茶境　奥田正造　七
三　歌ごころ　佐佐木信綱　二
四　藤の花ぶさ　諸家　一七
五　花と雨　三
一　花　本居宣長　三
二　雨の興　松平定信　三五

六　落花の雪　太平記　三〇
七　佐渡ヶ島　尾崎紅葉　三六
八　奥の細道　松尾芭蕉　四三
九　光堂　泉鏡花　五三
一〇　百蟲譜　横井也有　五九
一一　おらが春　小林一茶　六三
一二　樂聖ベートーヴェン　中澤臨川　七二
一三　歩いた途（詩）　河井酔茗　八一
一四　光頼の參内　平治物語　八三
一五　尊皇の精神　芳賀矢一　九一
一六　ゆく川の流　鴨長明　九九
一七　世界の四聖　高山樗牛　一〇六
一八　心と言葉　和辻哲郎　一一〇
一九　息女への教訓　鳥丸光廣　一一五
二〇　高瀬舟　森鷗外　一二〇
二一　思惟するもの　吉田絃二郎　一四五

二二　初雁を聞く　加藤千蔭　一五一
二三　芳宜園大人を祭る詞　村田春海　一五三
二四　明・淨・直　五十嵐力　一五七

——目次終——

東京大學圖書之印

新制女子國語讀本　卷七

一　風雅論

德冨蘇峰

名は猪一郎。思想評論家。貴族院議員。東京日日新聞社賓。熊本縣の人。文久三年(一八六三)生。

唯かりそめの旅の空に、同じ汽車の窓より彼方に聳ゆる山々の景色を眺めたるのみにても、風雅の感有る人と無き人とは、自ら其の興味を感ずる度を異にすべし。嗚呼、此の風雅の嗜みこそ、何人にもあり得べくして、又何人にもありたきものなれ。

世には風雅人とて、とかくに風雅といふことをば我が物とのみ思へる者あり。我が物と爲すは妨げずと雖も、これを我が專有物となさんとするに至りては、大いに不可なり。彼の世を避け、俗を脫して、山林に幽居し、花鳥風月をのみ友とする者、若しくは詩歌・書

畫・茶の湯・挿花・音樂の技藝に長じ、又は其等の鑑識に長じたるものの如き、此等はもとより世の所謂風雅人たるべき特權を有するものならん。しかも風雅の全權を專有し得べきものにはあらず。否、風雅の嗜みは何人にもあり得べきものなり。

凡そ其の境遇の如何に關せず、其の修養の多寡に係らず、すべていかなる人といへども、其の優美の心を以て宇宙と人とに接する時は、そこにいひ難き風雅の趣味を感得することを得べし。而して風雅の嗜みは、恆に此の心を存して失ふことなからんことを努むるによりて生ず。されば、風雅は、必ずしも萬卷の書を讀み破り、天地神人を究めたる學者にのみ存するにあらず。彼の眼に一丁字なき田夫野人と雖も、田畝の間に立ちて、春霞のたなびくひまより、遠山の端の夢の如く横たはれるを見て、いひ難き快感を其の胸裏に思ひ浮かべたる刹那に於ては、乃ち亦風雅の人たるなり。風

生田の森
神戸市下山手通生田神社の境内にある。

雅は又必ずしも櫻かざして遊ぶ大宮人にのみ存するにあらず。彼の心なき賤の草刈といへども、其の背負へる草束の間に一朶の花を挿みて、心融々として勞苦を忘れたる瞬間に於ては、乃ち亦風雅の人たるなり。唯そこに必要なるは、此の心を恆に存して失はざらんことを努むべきと、これを錬磨修養して愈〻其の眞醇に近からしむべきとの心掛のみ。

風雅は必ずしも外物に存せず。終生身を珍畫・名器の裏に置けども、遂に風雅の眞味を解すること能はざる者あり。必ずしも又技藝に存せず。世には、詩人といはれ、畫師と呼ばれ、音樂者と稱へられて、却つて眞の俗物なる者あり。人もし風雅の嗜みあらば、其の境遇や、技藝や、もとよりこれを助くるに於て大なるべしと雖も、しかも、單に此等のみによりて、風雅は卽ちこゝに在りと斷言すべきものにあらず。彼の生田の森の激戰に梅花を箙に挿みて、自ら

梶原景季
父景時と共に頼朝の臣。正治二年(一八〇)歿、年三十九。

標識したる梶原景季を見よ。風雅の風雅たる、それこゝに在らん。

風雅の嗜みは人の一生をして興味多からしむ。仰いで浮雲の白きを看、俯して百花の紅なるを觀れば、吾人は頓に自己を天地の懷裡に投ずる感あり。一片の明月は、何人といへどもよくこれをながむることを得べく、また富者と貧者とを差別せざるなり。風雅は貴族的にもあり。しかも最も多く平民的に存す。而して吾等は此の風雅の嗜みを、平民社會に普及せしむることの、世道人心を正す上に於て最も必要なるを見る。

風雅の嗜みある者は自ら餘裕あり。かゝる人は議會討論の場中に於ても、尙よく襟に挿める薔薇の花を愛する事を解せり。風雅の嗜みある者は自ら氣品あり。何となれば、利害得失の外に心目を快暢ならしむる天地を有すればなり。風雅の嗜みある者は、いかなる場合にも樂しみあり。何となれば、現在の齷齪たる社會

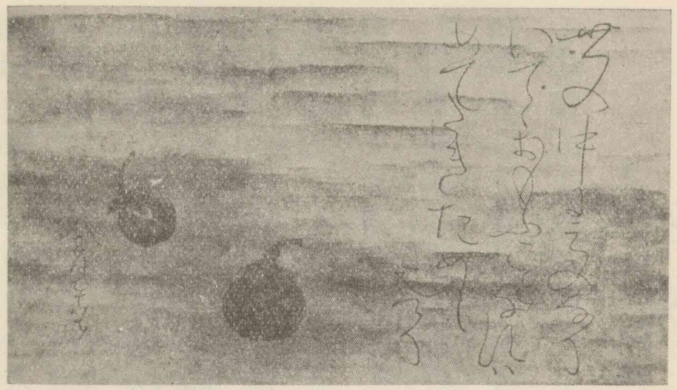
蓮月尼
太田垣蓮月尼。名は誠。愛兒及び夫を失ひ尼となつた。和歌・俳句をよくした。京都の人。明治八年歿、年八十五。

の裡にありて、よく宇宙と人との美を我が心に吸收することを得ればなり。風雅の嗜みある者は、又よく自ら容忍することを得。何となれば、其の暗黑なる一面を見ると共に、必ず他の光明なる一面を見ればなり。蓮月尼の歌にいはく、

宿かさぬ人のつらさを情にて
おぼろ月夜の花の下ぶし

と。若しかくの如く觀じ來らば、人生何に處してか自得せざらん。

世には千金を投じて茶碗を購ひ、萬金を抛ちて書畫を求めて、風流こゝにありと誇る者あり。若し其の人にして眞の風流を解し、且力よくこれ



蓮月尼茄子畫贊

今戸燒　東京市淺草區今戸に產する陶器の稱。

を致すに餘りあらば、我等は敢てこれを斥けじ。然れども其の人にして、徒らに器物の末に志を勞して、單に其の多きを貪り、其の奇を誇らんとならば、吾等はこれを指して玩物喪志の徒といはんのみ。豈許すに風雅を以てすることを得んや。これに反して、廢屋破窓のうち、新聞の挿畫を壁に挿み、今戸燒の茶碗にて澁茶を喫する人と雖も、其の心よくこゝに存せば、これ實に大なる風雅なるべきにあらずや。

（第二日曜講壇）

奥田正造　教育家。成蹊高等女學校長。岐阜縣の人。明治十七年生。

宗及　本姓名は今井久秀。茶道を武野紹鷗に學ぶ。

利休　本姓名は千宗易。千家流茶道の祖。天正十九年（一五九一）歿、年七十。

醒が井　滋賀縣坂田郡醒が井村。

二　茶境

奥田正造

主客ともに世塵のけがれを洗ひ去つて、靜寂の中、相和し相敬し、油然として樂しみの心に叶ふとき、之を茶境といふ。

降り積みし雪の面白さに、天王寺屋宗及、不時に利休の庵を訪れた。いまだ曉を催さざるに、門の戸は既に細目にあけられてゐた。案内を乞うて腰掛に至れば、庵をもるゝ名香、靜かな露地に薫つて、その趣一入である。迎へられて席に入れば已に松風の音さわやかである。閑談暫く時をうつす間に、勝手の戸を開く音がして、人のけはひがした。利休は「かゝる晨こそ醒が井の水をと思ひ、汲みに遣ししものはや歸り候ひつらん、とてもの事に釜を改めて一服參らせ候べし。」といひつゝ、釜をあげて水屋へ立つた。宗及は爐邊にうちより、炭のながれの見事さにしばし見とれてゐたが、心

道幸　道幸棚の略。茶室にある張出戸棚。

柳生但馬守　名は宗矩。新陰流剣法の名家。正保三年(一六四六)歿、年七十六。

片桐石見守　名は貞昌。石州流茶道の祖。延寶元年(一六七三)歿、年六十九。

づいて道幸の内を見ると、仕込んだ炭斗(すみとり)があつた。取出し、炭二つ三つさしくべて利休を待つた。やがて水を改め、濡釜として運び出した利休にむかひ、「炭のながれ誠に見事には候ひしかど、いづれ火相を御改めのことと思ひより候まゝ、炭二つ三つさしくべ候。」と挨拶した。利休はその心入れを感じ、かゝる人と茶をしてこそ、雪の晨の味も一入なれと喜んだ。

相和相敬の境なれば、勿論客にも客としての働きが大切ではあるが、主人の心づくしが主であるだけに、主人の一擧一動には能敬能清の眞がこもつて、茶境をして俗事雜境に陷らしめぬ樣に心がけ、手前に一點のゆるみのない樣につとめねばならない。柳生但馬守が片桐石見守の手前を見て、「尙この境に入り得るか。」と驚かれたといふ事である。身心をねるといふ上から見れば、そのねり上げたものは、劍を持つ手から始めても、茶杓を清むる手から始めても、別に變りのある筈はない。併しこのゆるみのないとは、自らも窮屈になり、客も窮屈にせよといふ意味ではない。主客一點のゆるみのない姿の裡には、共に煩思雜慮の走作を拂つて、主人は客の心となり、客は主人の心となり、主客一如に歸する事をいふのである。煩思雜慮は手前を亂す源である。それを除くためには練習がいる。その練習の結果純一無雜の境に悟入し得るのである。茶道で手前の習熟といふのは、運び・扱ひ等が機械のやうに出來るといふことではない。心の働きを加へて工夫した結果、和敬清寂に一如たる心身を作り上げることである。主客共に相和相敬し、能清能寂となるのである。

紹鷗　本姓名は武野仲村。茶人。弘治元年(一五五五)歿、年五十三。

利休の朝顏が見事だといふ評判を聞いて、紹鷗は拜見を所望した。利休はこの仰せを喜び、日を約して師をその庵に請じた。定日となり、紹鷗その庵に至れば、露地には朝顏の影も形もない。意

外の感に打たれつゝ席に入れば、床の花入に咲いた一輪の朝顔が、色も一入あざやかに師を迎へた。紹鷗は床前に坐し、膝を打つてこれを賞歎した。利休は凡ての朝顔を刈りつくし、只一輪に、迎ふる人と迎へらるゝ人との心づくしを集中して、主客一如の歸結を作り出だしたのである。紹鷗が「この心入れとても及ぶ所にあらず。」というたのも無理はない。

かく時刻を選び、形式を異にして工夫せらるゝ茶會で、開かるゝ茶境を、器物の飾り付けや案配で事すみたりと思ふのは、主客共に至らぬが故である。一期一會の思ひをやどして、萬事麁末なきやう實意をつくす主人のすゝめに、客も何一つおろそかならぬを感じ、自ら難値難遇の喜びを味はふ時、主客歴然として、而も主客一如たる境が開かれる。これを眞の茶境といふ。

（茶　味）

佐佐木信綱
文學博士。歌人。
三重縣の人。明治
五年生。

三　歌ごころ

佐佐木信綱

天地ひらけて、人が生まれ、言葉が生まれる。人の感動は言葉によつて表されるが、單なる言葉でなく、言葉を調べなして、自分の感動を傳へようとする。これが歌のはじめである。

歌のもとゐは愛づる心である。あらゆる感動のうちで、物を愛づる心は最も切である。しかして、愛づる心の最も切なるは、人をおもふ心である。歌は先づ、人を愛づる思ひを歌つたにはじまる。

上代の歌の遺つて居るのを其の數から見るに、相聞の歌が多い。ついで、戰爭の歌、酒の歌、哀傷の歌が見られる。これらも皆、愛づる心がもとゐとなる。戰爭の歌は、勝利を愛で、集團を愛づる心から、酒の歌は酒を愛づる心、酒に醉つた心境を愛づる心から、哀傷の歌は、愛づるあまりにいたむ心から生まれる。それらの歌についで

あらはれる風物自然の歌も、また山川・草木・鳥獸・蟲魚を愛づる心がもとゐとなるのである。

歌のもとゐたる愛づる心は、人間の始であり、終りである。人間の情は、その始より終りまで、常に愛づる心である。ねたみを、又うらみを抒べたものすら、愛づる心あればこそである。人を憎み、世を憤るも、その奥に、人に對して愛づる心を持ち、世に關心を持つからである。

歌は、物を愛づる心のあふれから出た。しかも、さけびではない。さけびをのどめて調べなされたのである。

歌は、雜音でない。さゝやきである。しかも力づよいさゝやき

歌は、時としては、朗らかなるほゝゑみである。

歌は、時としては、おのづからの吐息である。涙のこぼれる音で

ある。

歌は、時としては、虹のかけはしである。時としては、追ふに消えやすい淡い夢である。また忘れようとして忘られぬ濃い夢でもある。

歌は、時としては、目に見えぬものへの願ひであり、祈である。

歌の根元は、魂の聲であつた。しかして又、歌の極致は魂の聲である。

繪畫は、まづ目に訴へる藝術である。音樂は、まづ耳に訴へる藝術である。歌は、直接に人の胸に訴へる。歌は、他の藝術よりも、はるかに直接である。

繪畫にも、音樂にも歌がこもつてゐる。しかも歌は、より以上に繪畫と音樂とを持つてゐる。

天の心に神があり、天の形に日月・星辰がある。いづれも天の歌

である。

地の心に人があり、地の形に山川・草木がある。いづれも地の歌である。

地上に人間が生まれる。人間に感情が生まれる。感情の中から歌が生まれる。

歌は、天と地と人と、三才をあはせ持つ。

祖先の血は子孫につゞく。祖先の思ひは、歌によつて子孫に傳はる。歌は命の流である。

千年以前の人の聲は、今の吾等が胸に響く。千年以後の人も、恐らくは今の吾等が聲を聞くであらう。歌の命は永遠である。世を同じうして知つてをつた人の中に、また同人の中に、すぐれた歌人で、世を早くした數人がある。まことに惜しい極みである。しかし、すぐれた歌人に死はない。永久に生きながらへて居るので

同人　竹柏會の同人。

ある。

自分はかつて、人が歌を詠ままほしく思ふもとの心を、歌ごころといふ言葉を以て言ひ表した。人には誰にも歌ごころがある。その歌ごころは、うるはしき心のあらはれである。歌は、うるはしき歌ごころのあらはれである。

歌は、人の心の花である。花なき園はさびしい。歌なき人生はさびしい。

歌は、美の宗教である。歌によつて、人の心は清められ、やはらげられ、歌をとほして、人は永久の生命に通ふことが出來る。

宗教によつて、法の悦びにひたりうる人は、幸である。

美の宗教によつて、歌の悦びにひたりうる人も、また幸である。

上代の人の歌は、まごころから生まれた。自分はその歌ひざまを、ひたぶるごころと言うた。中世の人の歌は、みやびごころから

生まれた。いはゆる物のあはれ、幽玄、あそび、さびと變遷しては行つたが、根本はみやびごころであつた。現代の吾等の歌は、何から生まれるであらう。複雜な人間の底ごころの聲が、歌となるのである。

ひたぶるごころの歌から、みやびごころの歌へ。みやびごころの歌から、今は底ごころの歌である。いつの世に神ごころの歌が生まれるであらう。

（信綱文集）

正岡子規
名は常規。俳人。歌人。松山市の人。明治三十五年歿、年三十六。

四　藤の花ぶさ

正岡子規

瓶にさす藤の花ぶさみじかければたたみの上にとどかざりけり

春雨のけならべ降れば葉がくれに黄色ともしき山吹のはな

若松の芽だちのみどり長き日を夕かたまけて熱いでにけり

伊藤左千夫
名は幸次郎。歌人。千葉縣の人。大正二年歿、年五十。

伊藤左千夫

ゆづり葉の葉ひろ青葉に雨そそぎ榮ゆるみどり庭に足らへり

わかわかしき青葉の色の雨に濡れて色よき見つつ我を忘るも

漬物に汁に事足るあさがれひ不味しともせぬ兒等がかなしも

いとけなき兒等の睦びやしが父の貧しきも知らず聲樂しかり

長塚節
小說家。歌人。茨城縣の人。大正四年歿、年三十七。

長塚節

山椒の芽をたづね入る竹むらにしたごもりさく木いちごの花

垂乳根の母が釣りたる青蚊帳をすがしといねつたるみたれども

蝕ばみてほほづき赤き草むらに朝は含嗽の水すてにけり

單衣きてこころほがらになりにけり夏は必ず我れ死なざらむ

島木赤彦
本名久保田俊彦。歌人。長野縣の人。大正十五年歿、年五十一。

子どもらが鬼ごとをして去りしより日ぐれに遠しさるすべりの花

やまみちに昨夜の雨の流したる松の落葉はかたよりにけり

あさなあさな湖べにむすぶ薄氷晝間はとけて日和つづくも

湖向ひ日ねもすにして日のあたる枯芝山はあたたかく見ゆ

島木赤彦

齋藤茂吉
本名茂吉。醫學博士。歌人。山形縣の人。明治十五年生。

ゆらゆらと朝日子あかくひむがしの海に生まれてゐたりけるかも

のど赤き玄鳥ふたつ屋梁にゐて垂乳根の母は死にたまふなり

牝鶏ら砂あび居たれひつそりと剃刀とぎはすぎゆきにけり

朝あけて船より鳴れる太笛のこだまはながし並みよろふ山

齋藤茂吉

本居宣長
鈴の屋と號す。國學四大人の一人。伊勢國(三重縣)松阪の人。享和元年(一八〇一)歿、年七十二。

五花と雨

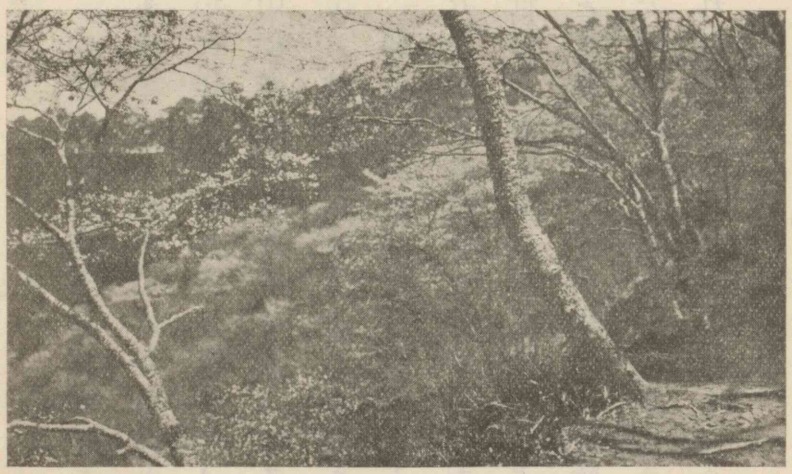
本居宣長

一花

花は櫻。櫻は山櫻の葉赤く照りて細きが、まばらにまじりて花繁く咲きたるは、またたぐふべきものもなく、うき世のものとも思はれず。葉青くて花のまばらなるは、こよなくおくれたり。大かた山櫻といふ中にも、品々のありて、細かに見れば、一木毎にいさゝかかはれるところありて、またく同じきはなきやうなり。すべて曇れる日の空に見あげたるは、花の色鮮やかならず。松も何も青やかに繁りたるこなたに咲けるは、色はえて、ことに見ゆ。空清く晴れたる日、日影のさす方より見たるは、匂こよなくて同じ花とも覺えぬまでなん。朝日はさらなり、夕ばえも。

梅は紅梅。ひらけさしたるほどぞいとめでたきを、盛りになる

ありて世の中云々
「殘りなく散るぞめでたき櫻花ありて世の中後のうければ。」
(古今集)



山櫻(吉野山)

まゝに、やう〳〵しらけゆきて、見所なくなるこそいと口惜しけれ。櫻の咲ける頃までも散ることを知らでむげに匂なくねびれ萎みて殘りたるを見れば、げにありて世の中は何事も皆かくこそと、見る春毎に思ひ知らるかし。白きはすべて香こそあれ、見る目は品おくれたり。大かた梅の花は、小さき枝をものにさして近く見たるぞ、梢ながらよりは優れる。桃の花はあまた咲き續きたるを遠く見たるはよし、近くてはひなび

たり。

山吹・燕子花・撫子・萩・薄・をみなへしなど、とりぐにめでたし。菊もよきほどにつくろひたるこそよけれ。餘りうるはしくしたゝかに作りなしたるは、なかく に品なく懷かしからず。つゝじ、野山に多く咲きたるは目さむる心地す。海棠といふものからめきてこまやかにうるはしき花なり。

抑かくいふは、皆おのが思ふ心にこそあれ。人はまた思ふ心異なるべければ、ひとやうに定むべきわざにはあらず。また今樣の世の人のもてはやすめる花どもも、世に多かるを數へいでぬは、ことさらめきたるやうなれど、歌にも詠みたらず、舊きものにも見えたることなきは、心のなしにや、懷かしからず覺ゆかし。されど、それはたひとやうなる僻心にやあらん。

（玉かつま）

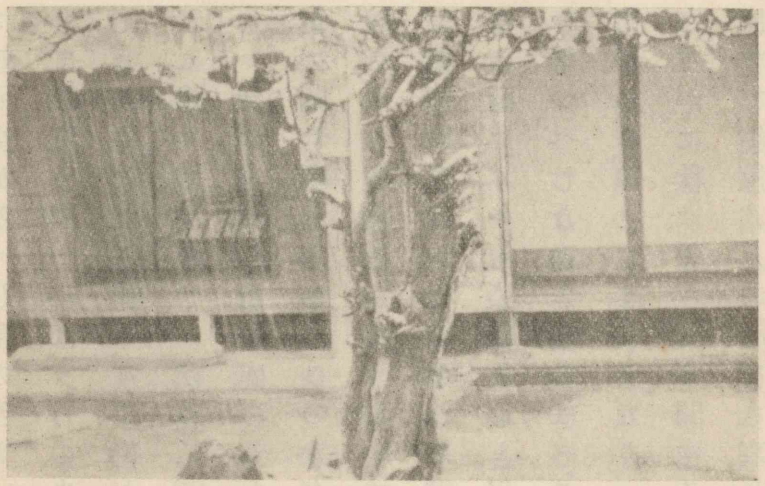
松平定信
奥州白河の城主。寛政時代の名老中。文政十二年（一八二九）歿、年七十二。

二　雨の興

松平定信

月の夜半こそ思ふ隈もなく、心の底も澄みわたりぬるものなれ。されど闇の夜の空晴れて、星の光さやかなるに、風高く吹き交ふは、またまさりぬるやうに覺ゆといへば、雨ぞいとまさりぬるをといふ。いかにと問へば、いでや旱天の雨はさらなり、草木の花咲き實のるも、皆この惠にこそあんなれ。またその感情の深さをいはば、けふは元日なりけりといふに、雨そぼ降りて霞みわたりたるは、げに春かなとぞ思ふめる。師走の晦日長閑に降りたるも、春待ち顔にていとをかし。すべて春は雨こそ長閑なれ。軒端より霞みわたりて、いとこまやかに降れるが、衣潤ほせども降るとは見えず。軒の玉水も間遠に音して、住み棄てし蜘蛛のいに玉ぬく景色、庭の面の枯生の底に綠やゝ添ひ行くも、柳の絲の動きもやらで露添ふ

も、共にいと長閑なり。燈火かゝげても、何となく光濕りたるに、鐘の音のほのかに響きくるも、心澄みわたりぬるぞかし。その外梅が香の濕り夜深く匂ひわたるも、花に憂しとかこちぬるも、哀れはありけり。春も老いゆく頃、蛙の時得顔にすだくもをかし。杜鵑の初音いかにと思ふ頃、むら雨のはら〳〵と降り出でたるも、五月雨の幾日も降り暮して、書の卷々繰り返しつゝゐたれば、何となく世の中のことにも遠ざかりぬる心地ぞする。また暑さに堪へかぬる頃、雲の漲り出づる勢ありて、風一しきり吹き落ちたるに、柳・蓮なんどの葉裏白く見せたるも涼し。やがて大きやかなる雨の間遠に落ちたるが、後には頻りに降り來て、もの音も聞えず、土の匂ひくるもいと心地よし。軒端は玉の簾かけたらんやうに、玉水の絶間なく落ちたるに、庭はひとつ湖となりてあるは瀧落し、または水走らせたるに、人々暫しものいはで、うち守りゐたるもをかし。や



興の雨

や雲薄くなれば、池の面には數ふるばかり雨見えて、小鳥など庭へ躍り出でて、餌拾ふさまなり。初め雲の立出でし方は、はや空の一入緑に見えて、虹なんど見ゆるに、木々の緑の庭潦（にはたづみ）に影見ゆるもいと涼し。老いたる女など雷（かみ）の音に驚きてはひ出でたるが、けふのは幼かりし時のごとよく晴れにけり、今時のはかく晴るゝこと稀なりなんど、はや繰り言いふもあり。彼はかくあわてしなど、かたみにいひて笑ひとよみつゝ、けふ

は蚊も少かるべし、雷の音もいと微かなり、この頃の暑さも忘れぬとて、端近う出づれば、夕月の光さしわたりて、草木の露も玉なすに、肥えふくれたる蛙の、もの待ち顔に空うちにらみて、ふつゝかなる音に鳴くもをかし。　秋くる頃の雨は、きのふに變りて何となう寂し。　荻の上風、外山の鹿の音なんど、月よりも身にしむ心地ぞする。常に聞き馴れしかけひの水の音までも哀れ深くこそ。　月の前のむら雨もまたをかし。　まいてやゝ夜寒の頃、鳴きからしたる蟲の音の、雨のをやみに幽かなる聲して、枕近く鳴きよるも哀れなり。この雨に木々も染めなんと思へば、茸なども生ひ出でなん、栗もはや落つべしなどと、わらはべのもの寂しげに燈に向かひつゝ言ひ出づるも、げにさま〴〵なり。　夜深き鐘の音のうち濕るものから、さすがに秋は聲さえて聞ゆるにぞ、今は世に亡き友のことも思ひ出でて、鐘撞く人の心をも哀れと思ふばかり、感情は深かりけり。

紅葉の染め添ふも、白菊の移りゆきて一盛り見するも、尾花の露重げにうち萎れたるに、りんだうの恨深く咲きたるあたりもつきづきし。　朝顔の皆枯れたる中に、さゝやかに赤う咲き出でたるが、畫過ぐるまでも凋み後れたる、また哀れなり。　野分の風はおどろおどろしきものから、雨は夕立に劣らざれど、さすがに哀れを添ふるは、秋の習なるべし。　時雨のさと音して、夕日に白く降りくるも、また音かへて枕とふもをかし。　月よりも闇の夜よりも哀れ深きものにははべらずやといへば、かうやうにいひ並べては、げにもといふべからんが、一年も降る心地してよみ見れば、この雨はをとつひより降り出でしをと思ふ心はかはらじと、心の中に思ひて聞きゐしもまたをかしかりけり。

（花月草紙）

俊基　藤原俊基。元弘二年（一九二）藤原資朝等とともに殺さる。

先年　後醍醐天皇正中元年（一九四）。

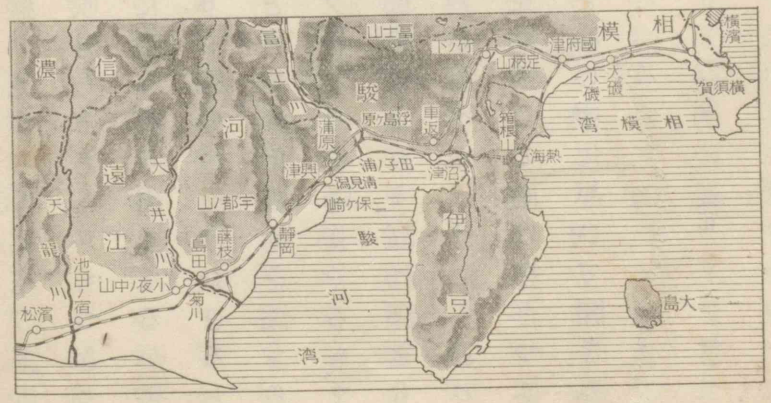
土岐十郎頼貞　俊基と結んで北條氏の滅亡を謀る。美濃國（岐阜縣）の人。

七月　元弘元年（一九一）七月。

六　落花の雪

俊基朝臣は、先年土岐十郎頼貞が討たれし後召捕られて、鎌倉まで下り給ひしかども、さまざまに陳じ申されし趣、げにもとて赦免せられたりけるが、又今度の白狀どもに、專ら隱謀の企彼の朝臣にありと載せたりければ、七月十一日に、又六波羅へ召捕られて、關東へ送られ給ふ。

再犯赦さざるは法令の定むる所なれば、何と陳ずるとも許されじ。路次にて失はるゝか、鎌倉にて斬らるゝか、二つの間をば離れじと、思ひもうけてぞ出でら



落花の雪云々　「またや見ん交野の春のみの櫻がり花の雪散る春の曙」（藤原俊成、新古今集）

交野　河内國（大阪府）北河内郡にある。

紅葉の錦云々　「朝まだき嵐の山の寒ければ紅葉の錦きぬ人ぞなき」（藤原公任、拾遺集）

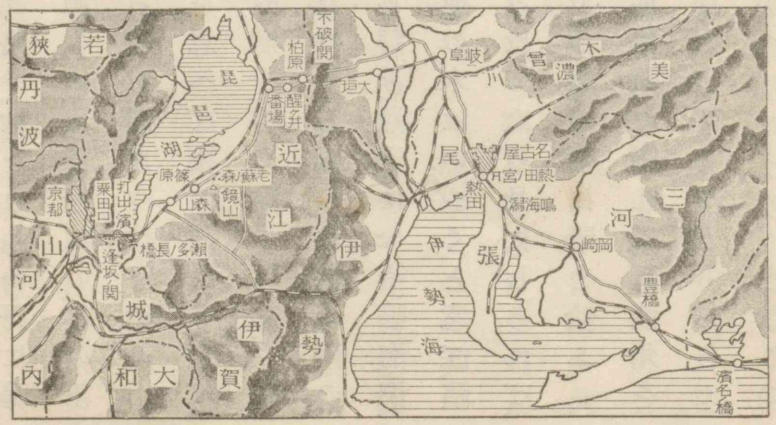
打出の濱云々　今の大津市松本、石場邊の古名。

駒もとゞろ云々　「貢物たえずそなふる東路の勢多の長橋音もとゞろに」（平兼盛、風雅集）

れける。

落花の雪に踏み迷ふ、交野の春の櫻がり、紅葉の錦をきて歸る、嵐の山の秋の暮、一夜を明かすほどだにも、旅寢となればものうきに、恩愛のちぎり淺からぬ、我が故郷の妻子をば、行くへも知らず思ひ置き、年久しくも住みなれし、九重の帝都をば、今を限りと顧みて、思はぬ旅に出で給ふ、心のうちぞあはれなる。

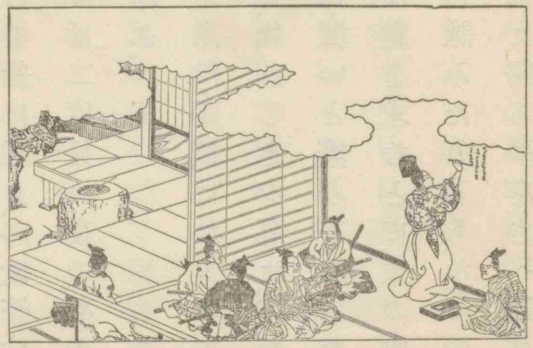
憂きをば留めぬ逢坂の、關の清水に袖濡れて、末は山路を打出の濱、沖を遙かに見渡せば、鹽ならぬ海にこがれ行く、身をうき舟の浮き沈み、駒もとゞろと踏みな



うねの野に云々
「近江より朝たちくればうねの野にたづぞ鳴くなる明けぬこの夜は。」（大歌所御歌、古今集）
時雨も云々
「白露も時雨もいたく守山は下葉のこらず色づきにけり。」（紀貫之、古今集）
鏡の山云々
「鏡山いざ立ちよりて見て行かん年へぬる身は老いやしぬると。」（大伴黒主、古今集）
不破の關屋云々
「人住まぬ不破の關屋の板びさし荒れにしあとはたゞ秋の風。」（藤原良經、新古今集）
鳴海潟
「さよ千鳥聲こそ近く鳴海潟傾く月に潮やみつらん。」（藤原季能、新古今集）
池田の宿
遠江國（靜岡縣）磐田郡、天龍川の西岸にある。
小夜の中山
遠江國（靜岡縣）小笠郡日坂の東にある坂嶺。

らす、勢多の長橋打渡り、行きかふ人に近江路や、世をうねの野に鳴くたづも、子を思ふかとあはれなり。時雨もいたく守山の、木の下露に袖ぬれて、風に露散る篠原や、篠分くる道を過ぎゆけば、鏡の山はありとても、涙に曇りて見えわかず、物を思へば夜の間にも、老蘇の森の下草に、駒をとゞめてかへりみる、故郷を雲や隔つらん。番場・醒が井・柏原・不破の關屋は荒れはてて、なほもるものは秋の雨の、いつか我が身の尾張なる、熱田の八劍伏し拜み、潮干に今や鳴海潟、傾く月に道見えて、明けぬ暮れぬと行く道の、末はいづくと遠江、濱名の橋の夕潮に、ひく人もなき捨小舟、沈みはてぬる身にしあれば、誰かあはれと夕暮の、入相なれば今はとて、池田の宿に着き給ふ。旅館の燈かすかにして、鷄鳴曉を催せば、匹馬風に嘶えて、天龍川を打渡り、小夜の中山越えゆけば、白雲路を埋み來て、そことも知らぬ夕暮に、家郷の天を望みても、昔西行法師が「命なりけり。」と詠じつ

西行法師
俗名佐藤義清。鳥羽上皇の北面の武士であつたが後出家して西行と號した。歌人。建久元年（一八五）歿、年七十三。
命なりけり云々
「年たけてまた越ゆべしと思ひきや命なりけり小夜の中山。」（新古今集）
菊川
遠江國（靜岡縣）榛原郡にある。
承久の合戰
仲恭天皇の承久三年（一八一）。
南陽縣云々
「南陽鄭縣有二甘谷一。谷中水甘美。上有二大菊一。落レ水從レ山流下。谷中人家飲二此水一。上壽百二三十、其中百餘歲、七八十者則爲レ天。」（風俗通）


菊川の宿

昔南陽縣、菊水
今東海道、菊川
と書きたりし、遠き昔の筆の跡、今は我が身の上になり、あはれやいとゞまさりけん、一首の歌を詠じて、宿の柱にぞ書かれける。

つ、再び越えし跡までも、うらやましくぞ思はれける。隙行く駒の足はやみ、日已に亭午に上れば、餉進らする程とて、輿を庭前に舁き止む。轅を叩いて警固の武士を近づけ、宿の名を問ひ給ふに、「菊川と申すなり。」と答へければ、承久の合戰の時、院宣書きたりし咎によつて、光親卿關東へ召下されしが、この宿にて誅せられし時、

汲下流而延齡
宿西岸而終命

いにしへもかゝるためしを菊川の
おなじ流に身をやしづめん

大井川を過ぎ給へば、都にありし名を聞きて、龜山殿の行幸の、嵐の山の花ざかり、龍頭鷁首の船に乘り、詩歌管絃の宴に侍りしことも、今は二度見ぬ夜の夢となりぬと思ひつゞけ給ふ。

島田・藤枝にかゝりて、岡邊の眞葛うら枯れて、物悲しき夕暮に、宇都の山邊を越えゆけば、蔦・楓いと繁りて道もなし。昔業平の中將の住處を求むとて、東の方に下りしに、「夢にも人に逢はぬなりけり。」と詠みたりしも、かくやと思ひ知られたり。清見潟を過ぎ給へば、都に歸る夢をさへ、通さぬ波の關守に、いとゞ涙を催され、むかひは

龍頭鷁首の船

龜山殿
京都市右京區嵯峨今の天龍寺境内。

島田・藤枝
駿河國（靜岡縣）志太郡にある。

岡邊の眞葛云々
「歸り來る程はなけれど朝露の岡邊の眞葛うら枯れにけり。」
（藤原爲家）

夢にも人に云々
「駿河なるうつの山邊のうつゝにも夢にも人にあはぬなりけり。」
（伊勢物語）

いづこ三穗が崎、興津・蒲原打過ぎて、富士の高嶺を見給へば、雪の中より立つ煙、上なき思ひに比べつゝ、明くる霞に松見えて、浮島が原を過ぎゆけば、潮干や淺き船浮きて、おりたつ田子のみづからも、浮世をめぐる車返し、竹の下道行きなやむ、足柄山の峠より、大磯・小磯見下して、袖にも波はこゆるぎの、急ぐとしもはなけれども、日數つもれば七月二十六日の暮程に、鎌倉にこそ着き給ひけれ。

其の日やがて南條左衞門高直請け取り奉りて、諏訪左衞門に預けらる。一間なる處に蜘蛛手嚴しく結うて、押籠め奉るありさま、只地獄の罪人の十王の廳に渡されて、頸枷・手枷を入れられ、罪の輕重を糺すらんも、かくやと思ひ知られたり。

（太平記）

上なき思ひに云々
「富士の嶺の煙はなほぞ立ちのぼる上なきものはおもひなりけり。」
（藤原家隆、新古今集）

七月二十六日
後醍醐天皇の元弘元年（一三一）七月二十六日。

太平記
四十卷。作者未詳。花園天皇の文保二年（一三一八）から後村上天皇の正平二十二年（一三六七）に至る凡そ五十年間の軍記物語。

尾崎紅葉
名は德太郎。小說家。東京市の人。明治三十六年歿、年三十七。

此　處
新潟縣直江津町。

香嶽樓
新潟縣中頸城郡一本木新田の赤倉溫泉場の旅館。筆者は二日間そこに泊つて、今朝立つて來たのである。

わが眉太し云々
「涼風のわが眉太し佐渡ヶ島。」（尾崎紅葉）

美人を天の一方に望む
蘇東坡の赤壁の賦の句。

溫泉水滑云々
白樂天の長恨歌の句。

七　佐渡ヶ島

尾崎紅葉

九時三十分に此處を發車して、忽ち眼明らかなりと驚けば、渺々たる日本海は折しも波に一船を着けず、雲に一鳥を帶びずして、千萬頃の虛しく闊きに、たゞ池の如き潮の浩蕩として遊ぶのであつた。と見るに、琉璃の煙るやうに物ありて、ほのかに顯るゝを、早くも「佐渡、々々。」と案內する聲がした。まことに香嶽樓の緣端に伸び上つて「わが眉太し」とこの美人を天の一方に望んだ佐渡ヶ島は、今目を遮るものもあらぬ三十海里の波上に「溫泉水滑洗凝脂。」とやうに浮かび出たのである。

美なるかな、この島の風情。凡そ眺めてかくも懷かしく、又譬へん方なく心動かさるゝ遠景色は、これを他に求めて己はありとも覺えぬ。直江津の古い「鹽たれ唄」とかいふのに、

來いと云々
俚謠の一節で、「來いとゆたとて行かりよか佐渡へ、佐渡は四十九里波の上。」と續くのである。

佐渡へ〳〵と草木も靡く
佐渡は居よいか住みよいか

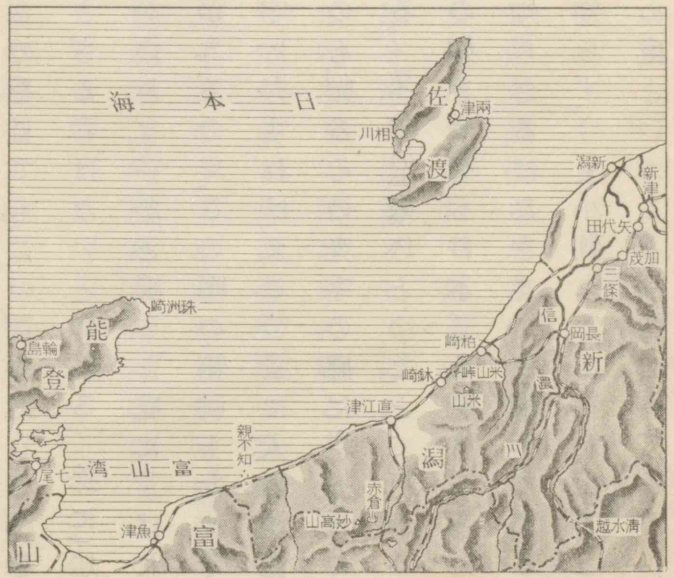
とあるのを見ても、この景に對して心を動かさざる者はないと知れる。殊に「居よいか住みよいか」と疑つた處に言はれぬ妙があるので、この唄の精神もたゞその九字に存すれば、又この景に人の恍惚たるのも、頗るその九字の感に堪へぬのである。又かの「來いとゆたとて行かりよか」の如きは、苟も日本語を解する者にして知らざるはなきまでに轟いてゐる。

佐渡ヶ島

其處が古の配處であつたとも知らず、今も小判になる物が出ると知らぬ輩でも、波の上の行かれぬ處といふことは皆心得てゐる。

それほどの口吟を思はずに誰一人こゝが過ぎらるゝであらう。

遙かに佐渡が見ゆる、「四十九里」と直ちに胸に浮かぶ、それにしては近いやうだといふ疑ひが又起るのである。能登の輪島から四十九里といふ説があつて、とにかく越後の唄ではないに極つてゐる。佐渡の相川の人の談に、極々快晴の日、所謂日本晴には、能登の珠洲崎が雲煙縹渺として、見えると謂へば見えるくらゐに見える。その人は一年の中に唯一度見たといふ。そ



輪島　石川縣鳳至郡にある町の名。

相川　佐渡にある町の名。

珠洲崎　石川縣珠洲郡に屬し、能登半島の最北端をなす岬。

岸田吟香翁　「東京日日新聞」の創始者。明治三十八年歿、年七十三。

鉢崎　新潟縣中頸城郡米山村に屬する字。この名の一驛がある。

柏崎　同縣刈羽郡に屬する町の名で、また鐵道の一驛である。

薩埵峠　靜岡縣庵原郡に屬する。

こで、「來いとゆたとて行かりよか」の、首を搔いて遠人を憶ふ惆悵無限の意が殊に深い。この、「來いとゆたとて」に就いて思ひ出したのは過ぐる年、富小路侍從の行くを送つて岸田吟香翁の歌がある、なかなか面白い。

大君のみことかしこみ來いとゆたとて行かりよかと
いふ佐渡へ行く君
己も亦一句なかるべけんやと、
來いといふ人あれ島は涼しげなり

抑この海の雄渾と併せてこの島の秀麗を見るのは、北越鐵道線の雙快の一で、他は更に進んで鉢崎から柏崎に抵るまで米山峠の眞下を磯傳ひに疾驅しつゝ、八門のトンネルを出入するのである。その趣は稍〻東海道線の薩埵峠を過ぐるに髣髴たるのであるが、これは皮相の似たるばかりで、彼に在つては全くこの氣魄を虧く。

碓氷　群馬縣碓氷郡と長野縣北佐久郡との境にある峠。海拔約一〇〇〇米。

道は荒波の磯邊であるから、一面巖石突兀として、或は潮に臥し、或は草に蹲まり、或は山に逆つて峙ち、或は水に臨んで仆るといふ有樣。さてその大いなるものに在つては、百歩にして崖と壅がり二百歩にして岩鼻と突き出るのを、總てトンネルに貫いて、佛に逢へば佛を殺し、祖に逢へば祖を殺し、道に當る者あれば必ず突いて進むのである。

トンネル續きの線路は、碓氷であれ、箱根であれ、皆理の同じからぬはないが、別して此處にその想があるのは、長汀逶迤として六枚屏風の將に疊まんずる如き曲折を盡くすが故に、甲のトンネルを出づれば直に乙のトンネルの全景が見える、乙を過ぐれば丙、丙が去れば丁と、彼等は爭つて五月蠅なすのが一々目に入る。譬へば己大剛の者にして、群る敵を物の數ともせず、當るを幸ひ、一太刀づつ片端から撫斬にして通るも斯くやと覺ゆるやうにて、而も處は

長岡　新潟縣の中央部にある市の名。
三條・加茂　共に同縣南蒲原郡に屬する町の名。
矢代田　同縣中蒲原郡小須戸町の一字。

弓手に方りて日本海、逃るゝ路も荒磯の浪韃靼と寄せては返す鬨の聲、馬手には峻嶺峨々として、當國無雙の名も高き米山峠は聳えたり、と思へば、殆ど快極つて肉躍るのであつた。此處を過ぐれば、汽車を嫌ふ者も汽車に在るのを忘れ、喜ばしからぬトンネルも時に取つての興となつて、なか〳〵神經などを衰弱させてゐる段ではなかつた。

柏崎を踰ゆれば線路は次第に海に遠ざかつて、長岡を過ぎ、三條に入らば、この邊からかけて、加茂・矢代田の水害は甚だしきもので、見ゆる限りは村もなく、小屋もなく、平一面の漠々たる青田である。その七分を領して氾濫する水は縱横に川を畫いて流れ、水嵩の厚き處は湖の狀をなして、漾々波を弄んでゐる。水漬しになつて稻の葉末の小指ほども出てゐる處を見れば、水さへ退けば舊のやうにぴんとなるのであらうと、たゞ水の勢を見て、害の恐るべきを知

のつたり
沼垂(ぬつたり)の訛。今は新潟市の一部。

日本五港
明治維新の初に開港場として開放した五つの港。横濱・神戸・長崎・新潟・函館。

北陸七箇國
若狭・越前・加賀・能登・越中・越後・佐渡。

らぬのであつたが、その水の退いた跡を過ぎて見ると慄然とした。苗は悉く根を拔いてぶつ倒れたのを、又この上から踏んづけ散らしたやうに、百方狼藉を極めた體たらくは、とても米の生る木と見る影はない。

水害の跡弔ふ田唄作らせよ

まどろむかと思へば、「のつたり」と呼び起されて、こゝで下りると慌てて停車場を出れば、三時十分。さて此處に八千八川の水を取つて一條の流に打成すと聞ゆる信濃川を帶びて、日本五港の一なる繁華と、北陸七箇國の大都會たる殷富とを左右にせる新潟市は、始めて己の眼に映ずるのであつた。

（紅葉全集）

松尾芭蕉
姓は松尾、名は宗房、別號桃青。俳人。伊賀國（三重縣）の人。元祿七年（一三五四）歿、年五十一。

月日は云々
「天地ハ萬物ノ逆旅ニシテ光陰ハ百代ノ過客ナリ。」（李白）

去年
元祿元年（一三四八）。

江上の破屋
江戸（東京）深川の芭蕉庵。

白河の關
磐城國（福島縣）西白河郡古關村大字旗宿。

杉風
本名鯉屋藤左衞門。芭蕉の門人。江戸の人。享保十七年（一三九二）歿、年七十八。

八 奥の細道

松尾芭蕉

一 首途

月日は百代の過客にして、往きかふ年もまた旅人なり。船の上に生涯を泛かべ、馬の口とらへて老を迎ふる者は、日々旅にして旅を住家とす。古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年よりか、片雲の風に誘はれて漂泊の思ひやまず、海濱にさすらひ、去年の秋、江上の破屋に蜘蛛の古巢を掃ひて、やゝ年も暮れ、春立てる霞の空に白河の關越えむと、そゞろ神のものにつきて心を狂はせ、道祖神の招きにあひて、取るもの手につかず。股引の破を綴り、笠の緒つけかへて、三里に灸すうるより、松島の月先づ心にかゝりて、住める方は人に讓り、杉風が別墅に移る。

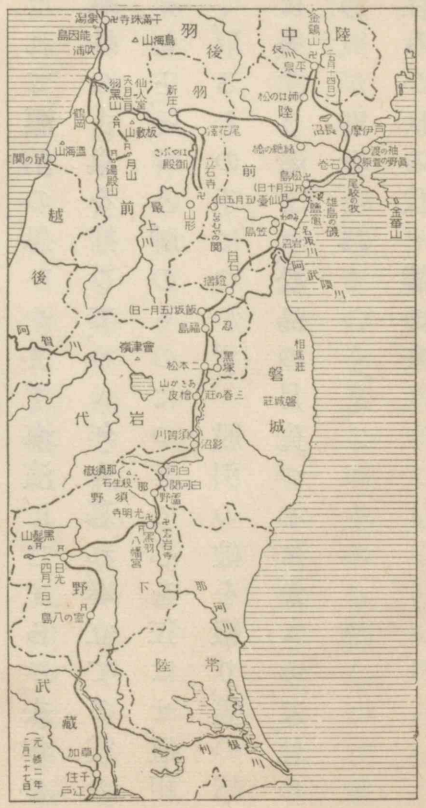
草の戸も住みかはる代ぞ雛の家

谷中　東京市の上野公園から西北に續く地。

千住　東京の東北口。奥州街道最初の宿驛。

草加　武藏國（埼玉縣）北足立郡奥州街道の宿。

彌生も末の七日、曙の空朧々として、月は有明にて光をさまれるものから、富士の嶺幽かに見えて、上野谷中の花の梢、又いつかはと心ぼそし。



陸奥中路

陸まじき限りは宵より集ひて、船に乘りて送る。千住といふ所にて船をあがれば、前途三千里の思ひ、胸に塞がりて、幻の巷に離別の涙をそゝぐ。

行く春や鳥鳴き魚の眼は涙

これを矢立の初として、行く道なほ進まず。人々は途中に立並びて、うしろ影の見ゆるまではと見送るなるべし。

今年元祿二年にや、奥羽長途の行脚たゞ假初に思ひ立ちて、吳天に白髮の恨を重ぬといへども、耳に觸れて未だ目に見ぬ境、若し生きて歸らばと定めなき頼みの末をかけ、その日漸く草加といふ宿にたどり着きにけり。瘦骨の肩にかゝれるもの先づ身を苦しむ。唯身すがらにといでたち侍るを、紙衣一衣は夜の防ぎ、浴衣・雨具・墨・筆の類、あるはさり難き餞などしたるは、さすがにうち捨て難くて、路次の煩ひとなれるこそわりなけれ。

芭蕉肖像

二白河の關

いかで都へ云々
「たよりあらばいかで都へつげやらんけふ白河の關は越えぬと」（平兼盛、拾遺集）

三關
勿來の關、鼠が關、白河の關。

古人冠を正し云々
藤原清輔の著した袋草紙に此の記事がある。

清輔
藤原清輔。二條天皇の頃の歌人。

曾良
俗稱河合宗五郎。芭蕉の門人。旅行の同伴者。寶永六年（一七〇九）歿、年六十二。

洞庭
支那湖南省にある大淡水湖。

西湖
支那浙江省にある湖。

浙江
支那浙江省にある。一名錢塘江。

心もとなき日數重なるまゝに、白河の關にかゝりて旅心定りぬ。いかで都へと便り求めしも理なり。中にも此の關は三關の一にして、風騷の人、心を留む。秋風を耳に殘し、紅葉を俤にして、青葉の梢なほあはれなり。卯の花の白妙に、茨の花の咲きそひて、雪にも越ゆる心地ぞする。古人冠を正し、衣裳を改めし事など、清輔の筆にもとゞめ置かれしとぞ。

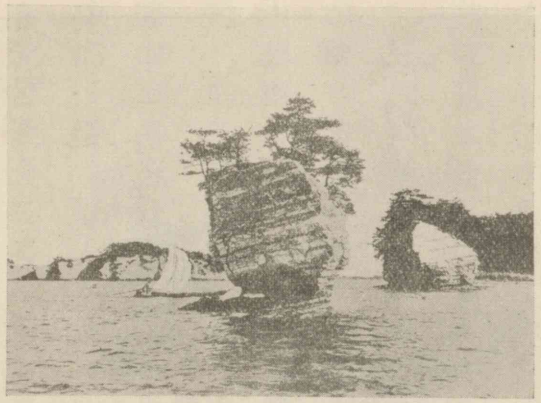
卯の花をかざしに關の晴着かな　曾良

三松島

抑〻事ふりにたれど、松島は扶桑一の好風にして、凡そ洞庭・西湖に恥ぢず。東南より海を入れて、江の中三里、浙江の潮を湛ふ。島々の數を盡くして、欹つものは天を指さし、伏すものは波に匍匐ふ。或は二重にかさなり、三重に疊みて、左に別れ、右に連なる。負へる

雲居禪師
瑞巖寺の中興の祖。萬治二年（一六五九）寂、年七十八。

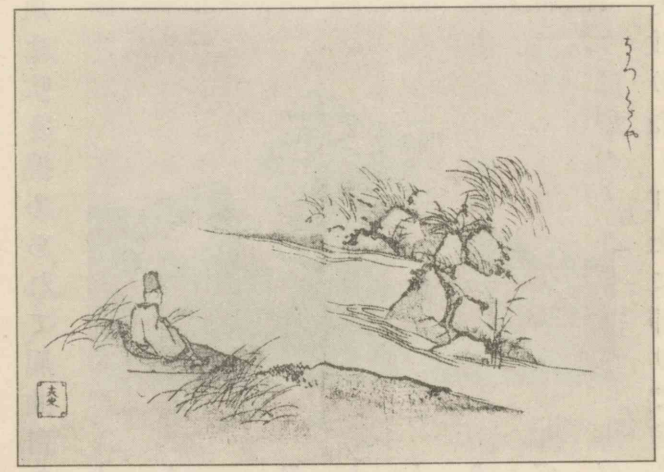
あり、抱けるあり、兒孫を愛するが如し。松の綠こまやかに、枝葉汐風に吹き撓められて、屈曲自ら撓めたるが如し。千早振神の昔、大山祇のなせる業にや、造化の天工、いづれの人か筆を揮ひ、詞を盡くさむ。


松島

雄島が磯は地續にて、海に出でたる島なり。雲居（うんご）禪師の別室の跡、坐禪石などあり。はた松の木陰に世を厭ふ人も稀々見えて、落穗・松笠などうち煙りたる草の庵、閑かに住みなし、いかなる人とは知られずながら、先づ懷かしく、立寄る程に、月海に映りて、晝の眺また改りぬ。江上に歸りて宿を求むれば窓を開き二階を作りて、風雲の中に旅寢するこそ、怪しきまで妙なる心地はせらるれ。

平泉
陸中國（岩手縣）西磐井郡にある。
あねはの松
陸前國（宮城縣）栗原郡にある。
緒絶の橋
同國志田郡にある。
石の卷
同國牡鹿郡の町にある。
黄金花咲く
「すめろぎの御代榮えんとあづまなるみちのく山にこがね花咲く。」（萬葉集）

松島や鶴に身をかれほとゝぎす　曾良



四　平泉

十二日平泉と志し、あねはの松、緒絶の橋など聞き傳へて、人跡稀に雉兎芻蕘の往き交ふ道そこともわかず。つひに道ふみ違へて、石の卷といふ湊に出づ。「黄金花咲く。」と詠みて奉りたる金華山、海上に見渡され、數百の廻船入江に集ひ、人家地を爭ひて、竈の煙たち續きたり。思ひかけずかゝるところにも來れるかなと、宿からむとすれど、更に宿かす人もなし。漸

袖の渡り
陸前國桃生郡橋浦町にある。
尾駮の牧
同牡鹿郡稻生村にある。
眞野の萱原
陸前國牡鹿郡稻生村にある。
長沼
同國登米郡新田村にある。
戸伊摩
同郡登米町。
三代
藤原清衡・基衡・秀衡の三代。
秀衡
陸奥・出羽押領使基衡の子。文治三年（一八四）歿。
秀衡が跡
伽羅の御所をいふ。
金雞山
秀衡、此の山を富士に象つて築き嶺に黄金の雌雄の雞を埋めた。
高館
衣川館。義經の居館
和泉が城
和泉三郎忠衡の居館。

くまどしき小家に一夜を明かして、あくれば又知らぬ道迷ひ行く。袖の渡り・尾駮の牧・眞野の萱原などよそめに見て、遙かなる堤を行く。心細き長沼にそうて、戸伊摩といふ所に一宿して平泉に到る。其の間廿餘里程とおぼゆ。

三代の榮耀一炊の中にして、大門の跡は一里此方にあり。秀衡が跡は田野になりて、金雞山のみ形を殘す。先づ高館に上れば北上川南部より流るゝ大河なり。衣川は和泉が城を繞りて、高館の下にて大河に落ち入る。泰衡が舊跡は衣が關を隔てて南部口を差固め、夷を防ぐと見えたり。さても義臣すぐつて此の城に籠り、功名一時の叢となる。「國破れて山河あり、城春にして草青みたり。」と、笠打敷きて、時の移るまで涙を落し侍りぬ。

夏草やつはものどもが夢のあと

かねて耳驚かしたる二堂開帳す。經堂は三將の像をのこし、光

泰衡　秀衡の第二子。

國破れて云々　「國破レテ山河在リ、城春ニシテ草木深シ。」（杜甫）

光堂　藤原清衡建立、延元二年修理す。

象潟　羽後國（秋田縣）由利郡、鳥海山の西北麓にある。

酒田　羽後國（山形縣）飽海郡最上川口にある。

鳥海の山　秋田・山形の兩縣に跨り、日本海岸に聳えてゐる。海拔二二三〇米。

能因島　能因法師の幽居の跡といふ。

堂は三代の棺を納め、三尊の佛を安置す。七寶散り失せて、珠の扉風に破れ、金の柱霜雪に朽ちて、既に頽廢、空虛の叢となるべきを、四面新たに圍ひ、甍を覆うて風雨を凌ぎ、暫く千歳の記念とはなれり。

五月雨の降りのこしてや光堂

五　象潟

江山・水陸の風光、數を盡くして、今象潟に方寸を責む。酒田の湊より東北の方、山を越え、磯を傳ひ、砂を踏みて、其の際十里、日影やゝ傾く頃、汐風眞砂を吹き上げ、雨朦朧として鳥海の山隱る。闇中に摸索して雨もまた奇なりとせば、雨後の晴色又頼もしと蜑の苫屋に膝を容れて、雨の霽るゝを待つ。

其の朝天よく霽れて、朝日花やかにさし出づるほどに、象潟に舟をうかぶ。先づ能因島に舟をよせて、三年幽居の跡をとぶらひ、向

花の上漕ぐ云々　「きさがたの櫻は波にうづもれて花の上こぐあまのつり舟。」（西行法師）

干滿珠寺　今は蚶滿寺といふ。曹洞宗の寺。

むやゝの關　羽前國（山形縣）南村山郡にあつたといふ。

西施　支那、越の美女。

ふの岸に舟を上れば、花の上漕ぐと詠まれし櫻の老木、西行法師の記念を殘す。寺を干滿珠寺といふ。此の寺の方丈に坐して簾を捲けば、風景一眸の中に盡きて、南に鳥海天を支へ、其の影映りて江にあり。西はむやゝの關、路を限り、東に堤を築きて、秋田に通ふ道遙かに、海北に構へて、浪打入るゝ所を汐越といふ。江の縱横一里ばかり、俤松島に通ひてまた異なり。松島は笑ふが如く、象潟はうらむが如し。寂しさに悲しみを加へて、地勢魂を惱ますに似たり。

象潟（芭蕉翁繪詞傳）

象潟や雨に西施がねぶの花

（奥の細道）

泉鏡花
小說家。名は鏡太郎。石川縣の人。明治六年生。

九光堂

泉鏡花

山路二町許り、中尊寺はもう近い。

大きな廣い本堂に、見上げる樣な釋尊の外、寂寞として何もない。それが莊嚴であつた。日の光が幽かにもれた。

裏門の方へ出ようとする傍に寺の厨があつて、其所で巡覽券を出すのを、車夫が取次いでくれる。巡覽すべきは、初め藥師堂、次に寶物庫、さて金色堂いはゆる光堂、續いて經藏、辨財天といふ順序である。皆參詣の人を待つて、始めて扉を開く。すぐまたあとを鎖すのである。寶物庫には番人がゐて、經藏には年紀の少い出家が、火の氣もなしに、一人經机に向つてゐた。

初め藥師堂に詣でて、それから寶物庫を一巡すると、此所の番人のお小僧が鍵を手にして、一條道を隔てた丘の上に導く。階の前

に八重櫻が枝もたわゝに咲きつゝ、且芝生に散つて、さながら敷いた樣であつた。

櫻は中尊寺の門内にも咲いてゐた。麓から上らうとする坂の下の取附の所にも、一本見事なのがあつて、山中心得の條々を記した禁札と一緒に、確か「淺葱櫻」といふ札が立つてゐた。けれどもそれのみには限らない。所々汽車の窓から見た櫻は、奥が暗くなるに隨つて、ぱつとさえを見せて咲いたのはなかつた。薄墨・鬱金、また淺葱といつた樣な、どの櫻も皆ぼつとりとして曇つて、暗い紫を帶びてゐた。雲が黑かつた爲かも知れない。

と、階の前の花片が、をりからの冷たい風にぱら〳〵と誘はれてさつと散つて、この光堂の中を空ざまにひらりと紫に舞ふかと思ふと、羽目に浮彫した孔雀の尾に、玉を刻んで綠青にさびたのが、尙嚴かに美しいその翼をぱら〳〵と叩いて、ちら〳〵と床にこぼれ

かゝる。やがて宙で黄金の卷柱の光を受けて、ぱつと金色に飜るのを見た時には、思はず驚歎の眼を見張つた。

床も、長押も、柱はもとより、佇む所、踏む所は、黒漆の落ちた黄金である。黄金の剝げた黒漆とは思はれないで、しかも些かのけばけばしい感じが起らぬ。さながら金粉の薄雲の中に立つた趣がある。我等仙骨をもたない身も、この雲は且踏んでも破れぬ。その雲を透かして、四方に七寶莊嚴の卷柱に對するのである。美しい虹をそのまゝ柱にして描いた十二光佛の微妙な種々相は、一つ一つ錦の絲に白露を鏤めた如く、玲瓏として珠玉の中に顯れて、清く明らかに、しかも幽かな幻である。その十二光佛の周圍には、玉螺鈿を星の流れるが如く輝かして、實相華・勝曼華が隙間もなく咲きめぐつてゐる。

この柱が須彌壇の四隅にある。誠に天上の柱である。須彌壇

清衡　陸奥押領使。後三年の役、源義家に與して出羽の清原氏を攻めてこれを滅し、功により清原氏のもとの地を領した。子基衡、孫秀衡その後を承け、代々平泉にあつて勢を振つた。

迦陵頻伽　梵語。妙聲鳥と譯す。

は三座あつて、壇上には彌陀・觀音・勢至の三尊、二天・六地藏が安置され、壇の中には眞中に清衡、左に基衡、右に秀衡の棺が納り、此所に各一口の劍を抱き、鎭守府將軍の印を帶び、錦袍に包まれた三つの屍が、まだそのまゝに横たはつてゐるさうである。

雛芥子の紅は美人の屍より咲いたと聞く。光堂は此所に三箇の英雄が結んだ金色の果なのである。

謹んで辭して、天界一叢の雲をおりた。

階をおりざまに見返ると、外圍の天井裏に蜘蛛の巢が掛つて、風に輕く吹かれながら、きら〳〵と輝くのを、不思議な塵よと見れば、一粒の金粉の落ちて輝くのであつた。

さて經藏を見よ。またいやが上に懷かしい。

羽目には天女、迦陵頻伽が髣髴として舞ひつゝ、奏でつゝ、浮き出てゐる。影を受けた束・貫の材は、鈴と草の花との玉の螺鈿である。

優闐王
印度拘睒彌國の王の名。

善哉童子
華嚴經にとかれた求法者。

淨名居士
維摩詰のこと。釋迦と同時代の人。

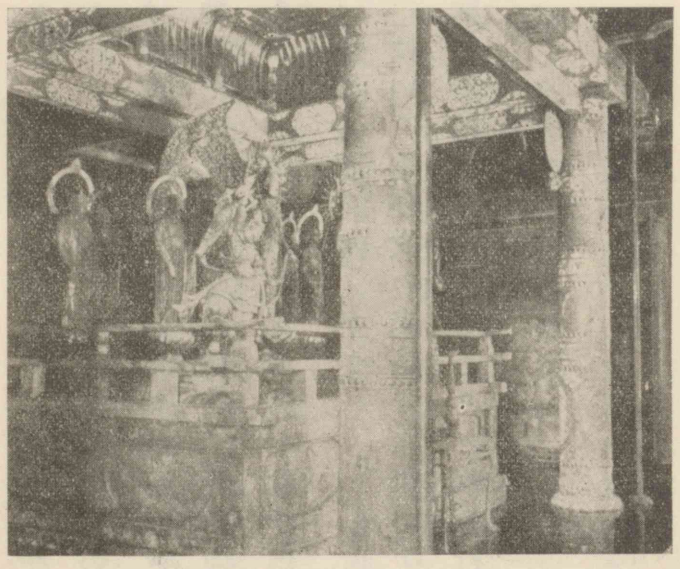
佛陀波利
北印度の商人。佛成道後最初に歸依した人。

光堂

漆塗、金の八角の臺座には、本尊文殊師利、朱の獅子に騎しておはします。獅子の眼は爛々として、赫と眞赤な口をあけた、青い毛の部厚な横顔が見られるが、づづつと足を擧げさうな構である。右にこのくつわを取つて、ちよつと振向いて、菩薩に物を言ひさうなのが優闐王、左に一匣を捧げたのは善哉童子、この兩側左右の背後に淨名居士と佛陀波利とが、一は拂子を振り、一は錫杖に一軸を結んだのを肩に擔ぐ樣に杖ついて立つ。髭も、額も、目も、眉も、その何れも莞爾々々として、文殊も微笑

毛越寺
鳥羽天皇の勅願所で藤原基衡建立に係る。今は廢滅して僅かに法華堂・常行堂を殘すのみである。

んでします。第一獅子が笑ふのである。獅子が。



光堂内部

この須彌壇を左に一架を高く設けて、此所に紺紙金泥の一卷を半ば開いて捧げてある。見返しは金泥・銀泥で、本經の圖解を描く。清麗巧緻で、且神祕である。

今此所に來てこの經を見ると、毛越寺の彼は恰も砂金を捧げるが如く、これは月光を仰ぐ樣であつた。

架の裏に色の蒼白い瘦せた墨染の若い出家が一人ゐた。私の一禮に答へて、お緩り御覽な

さい。」

二三の散佚はあらうが、言ふまでもなく、堂の内壁にめぐらした八つの棚に滿ちて、二代基衡のこの一切經、一代清衡の金銀泥一行まぜ書の一切經、並びに判官びいきの第一人者三代秀衡老雄の奉納した黄紙宋板の一切經が、皆黑燿の珠玉の如く漆の架に滿ちてゐる。一切經の全部量は、七馱片馬と稱へるのである。

「拜見を致しました。」

「はい。」と腰衣の素足で立つて、すつと經藏を出て、ほゝ齒の高足駄で、卷袖で、寒くほつそりと草を行く。清らかな僧であつた。

（鏡花全集）

横井也有名は時般。尾張藩士。俳文家。天明三年（一七八三）歿、年八十二。

莊周が夢云々「昔莊周、夢ニ胡蝶トナル。栩々然トシテ胡蝶ナリ。自ラ喩シミテ志ニ適フ、周ナルヲ知ラズ。俄然覺ムレバ、蘧々然トシテ周ナリ云々。」（莊子）

古今

古今和歌集。その序文に「花に鳴く鶯、水に住む蛙の聲きけばいきとし生けるもの、いづれか歌をよまざりける云々。」とある。

やがて死ぬ云々「やがて死ぬけしきは見えず蟬の聲。」

一〇 百蟲譜

横井也有

蝶の花に飛びかひたる、やさしきものの限りなるべし。それも啼く音の愛なければ、籠にくるしむ身ならぬこそなほめでたけれ。さてこそ莊周が夢も、このものには託しけめ。蛙は古今（こきん）の序に書かれてより、歌よみの部に思はれたるこそ幸なれ。朧月夜に風しづまりて、遠く聞ゆるはよし。古池に飛んで翁の目をさましたれば、この物の事さらにも誇りがたし。

蟬はたゞ五月晴に聞きそめたるほどがよきなり。やゝ日ざかりに啼きさかる頃は、人の汗しぼる心地す。されば初蝶とも初蛙ともいふ事をきかず、このものばかり初蟬といはるゝこそ大いなる手がらなれ。「やがて死ぬけしきは見えず。」と、このものの上は翁の一句に盡きたりといふべし。

貧の學者
晉の車胤。字は武子。家貧しく油を購ふことが出來なかつたので夏日螢を燈として學んだといふ。

螢は比ぶべきものもなく、景物の最上なるべし。水に飛びかひ、草にすだく。五月の闇は、たゞこのものの爲にやとまでぞ覺ゆる。しかるに貧の學者にとられて、油火の代りにせられたるは、このものの本意にはあらざるべし。

横井也有

日ぐらしは多きもやかましからず。暑さは晝の梢に過ぎて、夕は草に露おく頃ならん。つくつくぼふしといふ蟬は、つくし戀しといふなり。筑紫の人の旅に死にて、このものになりたりと世の諺にいへりけり。あはれは蜀魂の雲に叫ぶにも劣るべからず。

蚊はにくむべき限りながら、さすが卯月の頃、端居めづらしき夕べ、始めてほのかに聞きたらん、又は長月の頃、力なく殘りたるは、淋

七賢
支那晉の竹林の七賢
阮籍、嵇康、山濤、向秀、劉伶、王戎、阮咸。

こがね蟲

しきかたもあり。蚊屋吊りたる家のさま、蚊遣燒く里の煙など、かつは風雅の道具ともなれり。藪蚊は殊にはげしきを、かの七賢の夜咄には、いかに團扇の隙なかりけん。

蠶の生涯は世の爲に終り、火とり蟲はたが爲に身を焦すや。蜉蝣ははかなきためしにひかれ、蓼くふ蟲は物ずきの謗となれり。

おなじ寶の名によばれて、玉蟲はやさしく、こがね蟲は卑し。

蟻は明暮にいそがしく、世の營みに隙なき人には似たり。東西に聚散し、餌を求めてやまず。さるもたより惡しき方に穴を營みて、千丈の堤を崩すべからず。

蝸牛は家をもちたれども、行く先々を負ひあるくは水雲の安きにも似ず。蛇・蚯蚓の足なくても歩むべくば、蜈蚣をさむしの數多きは不用の事なり。

蟷螂の瘦せたるも、斧を持ちたる誇より、その心いかつなり。人

原・吉原
東海道の宿の名。

きり〳〵す云々
「秋風にほころびぬらし藤ばかまつゞりさせてふきりぎりす鳴く。」
（古今集）

藻にすむ蟲
「あまのかる藻にすむむしのわれからとねをこそ泣かめ世をばうらみじ。」
（古歌）

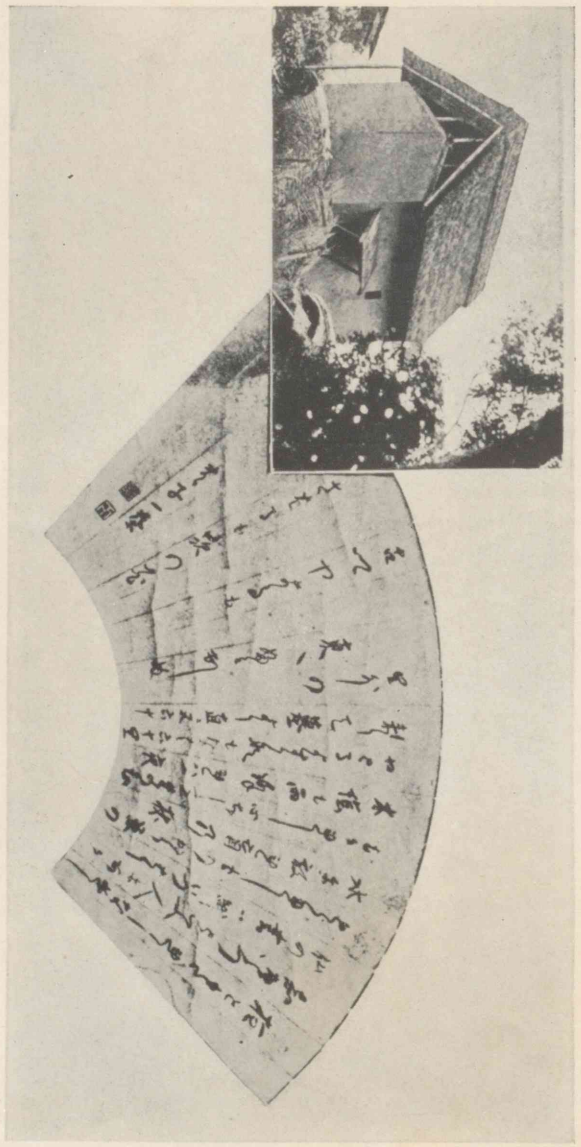
の上にもこのたぐひはあるべし。

蟹の歩みにたとふべきものこそなけれ。たゞ原・吉原を駕に乘りて、富士を眺めゆく人には似たり。

促織（はたおり）・鈴蟲・轡蟲は、その音の似たるをもつて名によべり。松蟲のその木にもよらぬに、いかでかく名を附けたるならん。毛生ひむくつけき蟲にも同じ名ありて、松を枯らし人にうとまる。一つ在所に、二人の八兵衛ありて、一人は後生を願ひ、一人は殺生を事とす。これ松蟲のたぐひなるべし。

きり〳〵すのつゞりさせとは、人のために夜寒を教へ、藻にすむ蟲はわれからと、たゞ身のうへをなげくらんを、蓑蟲の「ちゝよ。」と呼ぶは、母をば慕はで、など父をのみ慕ふらんとあやし。

（鶉衣）



面扇と藏王の焉終茶一

小林一茶
通稱は彌太郎。俳人。信濃國（長野縣）の人。文政十年（一八二七）歿、年六十五。

普甲寺
京都府與謝郡にあつた寺。

彌陀佛
阿彌陀佛の略。西方、極樂世界に住するといふ佛。

二　おらが春

小林一茶

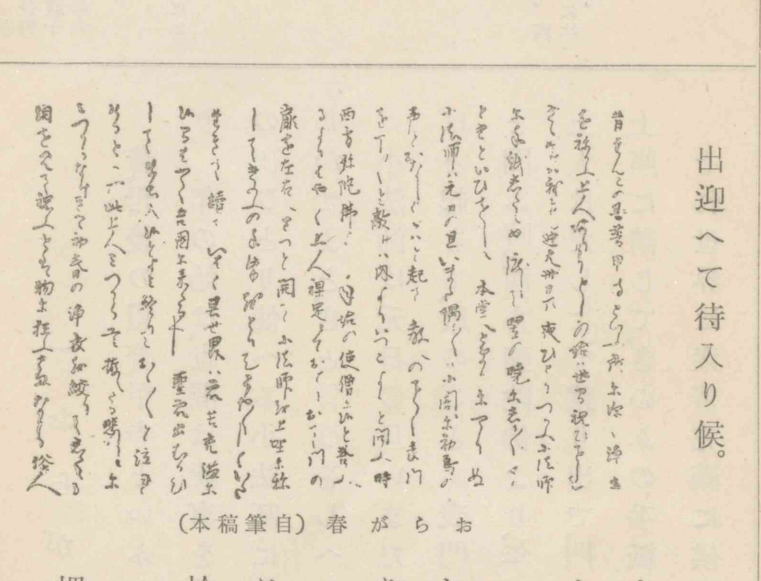
一　おらが春

昔、丹後の國普甲寺といふところに、深く淨土を願ふ上人ありけり。年の始は、世間は祝事をしてさゞめけば、我もせむとて、大晦日の夜、ひとり使へる小法師に、手紙したゝめ渡して、あすの曉にしかじかせよと、きと言ひをしへて本堂に泊りにやりぬ。

小法師は、元日の旦、いまだ隅々は小暗きに、初鷄の聲と同じく、がばと起きて、教のごとく表門を丁々とたゝけば、内より「何處より。」と問ふ時、「西方彌陀佛より、年始の使僧に候。」と答ふるよりはやく、上人はだしにて躍り出で、門の扉を左右へさつと開きて、小法師を上座に請じて、きのふの手紙をとりて、恭しく押戴きて讀みて曰く、

それ世界は衆苦充滿に候間、はやく我が國に來るべし。聖衆

出迎へて待入り候。



おらが春（自筆稿本）

と讀み終りて、おう〳〵と泣かれけるとかや。

この上人、自ら企みこしらへたる悲しみに、自ら嘆きつゝ、初春の淨衣を絞りて、滴る涙を見て祝ふとは、ものに狂へる樣ながら、俗人に對して無常をのぶるを禮とすると聞くからに、佛門に於ては祝の骨張なるべし。

それとは些か變りて、己等は俗塵に埋れて世渡る境涯ながら、鶴龜にたぐへての祝づくしも、厄拂の口上めきて空々しくおもふからに、から風の吹けば飛ぶくず屋は、くず屋のあ

るべきやうに、門松立てず、煤掃かず、雪の山路の曲りなりに、今年の春もあなた任せになむ迎へける。

めでたさも中位なりおらが春

こぞの五月、生まれたる娘に、一人前の雜煮の膳を据ゑて、

這へ笑へ二つになるぞ今朝からは

二　さな子

こぞの夏、竹植うる日のころ、うき節しげき浮世に生まれたる娘、おろかにして、ものにさとかれとて、名を「さと」と呼ぶ。

ことし誕生日祝ふころほひより、手うち〳〵、あはゝ、天窓てんてん、かぶり〳〵振りながら、同じ子どもの風車といふものをもてるを、しきりにほしがりてむづかれば、とみに取らせけるを、やがてむしやむしやしやぶつて捨て、露ほどの執念なく、直ちに外の物に心

こぞ　去年。文政元年（二四七八）をさす。

竹植うる日　陰暦五月十三日。

うつりて、そこらにある茶碗をうちやぶりつゝ、それも直ちに倦みて、障子の薄紙をめりく〳〵むしるに、「よくした、よくした。」とほむれば、まことと思ひ、きやらく〳〵と笑ひて、ひたむしりにむしりぬ。心のうち一點の塵もなく、名月のきらく〳〵しく清く見ゆれば、迹なき俳優（わざをぎ）見るやうに、なか〳〵心の皺を伸ばしぬ。又、人の來りて、「わんわんは何處に。」といへば犬に指さし、「かあく〳〵は。」と問へば烏に指さすさま、口もとより爪先まで愛敬こぼれて愛らしく、いはば春の初草に胡蝶の戯るゝよりも優しくなん覺え侍る。

このをさな、佛のもりし給ひけむ、逮夜の夕暮に、持佛堂に蠟燭てらして鈴うち鳴らせば、何處にゐてもいそがはしく這ひよりて、さわらびのちひさき手を合はせて、なんむ〳〵と唱ふる聲、しをらしく、ゆかしく、なつかしく、殊勝なり。それにつけても、おのれ頭には幾らの霜をいたゞき、額にはしば〳〵波の寄せくる齡にて、彌陀たのむすべも知らで、うか〳〵月日を費すこそ、二つ子の手前も恥づかしけれと思ふも、その座を退けば、はや地獄の種を蒔いて、膝にむつるゝ蠅を憎み、膳をめぐる蚊をそしりつゝ、あまつさへ佛の戒めし酒を呑む。

二十五菩薩　念佛の行者の臨終に際し、極樂淨土に導くため來迎する二十五の菩薩。

折から門に月さしていと涼しく、外にわらはべの踊の聲すれば、直ちに小椀投げすて、片ゐざりにゐざり出でて、聲をあげ、手眞似して、うれしげなるを見るにつけつゝ、何時しか、かれをも振分髪のたけになして、踊らせて見たらむには、二十五菩薩の管絃よりも遙かにまさりて興あるわざならむと、わが身に積る老を忘れて、憂さをなむ晴らしける。

かくひねもす、牡鹿の角の束の間も、手足を動かさずといふことなくて、遊び疲るゝものから、朝は日のたくるまで眠る。その内ばかり、母は正月と思ひ、飯焚き、そこら掃き片づけて、團扇ひらく〳〵汗

をさまして、閨に泣聲のするを目の覺むる相圖と定め、手がしこく抱き起して、裏の畠に尿やりて、乳房あてがへば、すはく吸ひながら胸板のあたりを打ちたゝきて、にこく笑ひ顔をつくるに、母はながく胎内の苦しみも、日々襁褓のけがらはしきもほとく忘れて、衣のうちの珠を得たるやうに撫でさすりて、ひとしほ悦ぶ有様なりけらし。

蚤のあと數へながらに添乳かな

より〳〵思ひよせたる小兒をも、あそびづれにもと此處につどへつ。

柳からももんぐああと出る子かな

小兒の行末を祝して、

たのもしやてんつるてんの初袷

三　露の世

樂しみ極りて愁起るはうき世のならひなれど、未だ樂しびも半ばならざる、千代の小松の二葉ばかりの笑ひ盛りなるみどり子を、寢耳に水のおし來る如きあらく〳〵しき痘の神に見込まれつゝ、いま水膿のさなかなれば、やをら咲ける初花の泥雨にしをれたるに等しく、側に見る目さへくるしげにぞありける。是も二三日經たれば痘はかせぐちにて、雪解の峽土のほろ〳〵落つるやうに、瘡蓋といふもの取れば祝ひはやして、さん俵法師といふを作りて笹湯浴せる眞似かたして、神は送り出したれど、益〻弱りて昨日より今日は頼みすくなく終に六月二十一日の朝顔の花と共に、此の世をしぼみぬ。母は死顔にすがりてよゝく〳〵と泣くも宜なるかな。この期に及んでは行く水の再び歸らず、散る花の梢にもどらぬくい

ごとなど、あきらめ顔しても、思ひ切りがたきは恩愛の絆なりけり。

露の世はつゆの世ながらさりながら　（おらが春）

四　雀の子

我と來て遊べや親のない雀
雀の子そこのけそこのけ御馬が通る
やせ蛙負けるな一茶ここにあり
大螢ゆらりゆらりと通りけり
我が門へ來さうにしたり配り餅

一三　樂聖ベートーヴェン

中澤臨川

中澤臨川
名は重雄。工學士。文學者。長野縣の人。大正九年歿、年四十三。

「かなしみを經てのよろこび」――これが、ルドウィツヒ・フォン・ベートーヴェンの一生の格言であつた。彼の一生は、決して野心家を滿足させるやうな教訓をも逸話をも有してゐない。それは、苦しんでゐる者のために、眞に苦しむことの出來る力のある者のために、「聖なるかなしみの甘露」を惠むものである。

記憶せよ、――特に若い人々のためにいふ。――この世は薔薇の花の敷かれた街ではない。それは、偉大を希ふものにとつては、常に孤獨と寂寥とに追はれなければならない山徑である。最も强いものでさへも、或時は悲哀と失望との爲に、おのづとその頭を垂れないではゐられない場合がある。

記憶せよ、こんな場合に、眞の偉人が汝を助けに來る。ベートー

ヴェンが汝に役立つ。

凡庸な、利害・得失の世俗戰に倦み疲れた時、ベートーヴェンの持つてゐるやうな信念と意志との世界に、暫くでも身を置くことは、どれだけ我々にとつて強味であらう。偉人の身邊には、言葉にいひあらはすことの出來ない勇氣の感染力がある。

我等は運と偶然とによつて、物質界に成功した著名の人達を忘れよう。たゞ心の偉大であつたものだけが、ヒーローの名に値する。人間の偉大さを計る尺度は人格である。我等は成功を說くまい。要は偉大であることであつて、偉大に見えることではない。

偉人の生涯は長い犧牲に外ならない。悲慘な運命が、彼等の肉と靈との苦しみの鐵砧の上で、彼等の精神を鍛へあげた。彼等は、朝に夕に苦痛と試煉とのパンを食べた。

彼等は何のためにそれだけ苦しんだのであらう。それは、後の

世の、より強い仲間を助けるために、またそれに力と惠とを與へるためであつた。

ベートーヴェンの生家(ボン)

ボン　獨逸國プロシヤの都會、ライン河の左岸に在る。

ベートーヴェンは一七七〇年ボンに生まれた。彼の祖父も父も、その土地の王室附の賤しい音樂師であつた。彼の母は、やはり貧しいコックの娘であつたが、その夫の酒癖のために、一生を一つの樂しみも知らないやうにして送つた。

ベートーヴェンは、四歳の時からもう音樂を習はせられた。そして、殘酷な父のために、死ぬほどひどい苦行をさせられた。十一歳から、或劇場のオーケストラに出て、一家の生計を助けねばならなかつた。

作曲に耽るベートーヴェン

彼は、十八歳の時、眞實たよりにしてゐたその母を失つた。彼は、その以前から、一家の主人役として、二人の弟を育てねばならなかつた。彼の父は、酒のために全く仕方のないものになりおほせてゐたので、その受ける養老金さへ、直接子供の手に渡されるといふやうな始末であつた。かやうな苦しい經驗は、一生消しがたい深い印象を、この若い音樂家の胸に與へた。

一七九二年、彼はウインナへ去つた。傷ましい生活の中にも、さすがに若く美しい夢をはぐくんだ靜かなライン河の岸邊を見棄てることが、どんなに惜しまれたことであらう。「我が故郷！　そこは、私が始めて、日の光を見たところ、今も昔のやうに美しいところ」といつて、彼は一生その故郷を慕つた。

その頃から彼の天才が漸く芽を吹きかけた。一七九六年、彼は自分の手帳にかう書きつけた。「勇氣！　私の身體の虛弱にもかかはらず、私の天才は前途に輝くであらう。——二十五歳！　その年齢に今私は達した。——この年齢は、人間がその全部を發揮せねばならぬ時だ。」と。彼はまたかういつた。「私の藝術は、貧しいものを救ふより外の目的に捧げられてはならぬ。」と。

ちやうどその頃から、また最大の不幸が、彼の身體に一生の宿を取つた。彼は聾になり初めた。世に、音樂家がその耳を失ふこと

ほど悲しむべきことがあらうか。彼は堪へることの出來ないほどの苦痛を忍んで、幾年かの間それを人に隱してゐた。併し、いよいよ恢復の見込の立たなくなつた時、劇しい絶望を以てこれを友達に打明けねばならなかつた。「親愛なる友よ、お前のベートーヴェンほど不幸なものはない。私の一番貴い部分である聽感が、今私を見捨てつゝある。――すべて私の愛するもの、私に親愛なあらゆるものを捨ててまで、このみじめな邪慳な世の中に生きながらへねばならぬ私の一生はどんなに悲慘であらう。――私はしば〳〵この身を呪つた。――私はブルタークから、忍從の德を教はつた。出來ることなら、私の運命が私に與へたところに堪へ忍ばうと思ふ。しかし、この廣い天が下にも、私ほど不幸な生き物があるだらうかと、つら〳〵考へ惱むことがある。――忍從よ、悲しい隱れ場所よ、たつた一つの私の隱れ場所よ。」

ブルターク　英雄傳の著者。ギリシヤの人（西紀五〇―一二〇）。

一八〇六年、彼はテレゼ・フォン・ブランスウィック女史と婚約した。しかるに、この平和もまた永くは續かなかつた。彼等は互に相愛しながらも、自然に遠ざかつてしまつた。

それからは、ずつと孤獨の生活が續いた。しかも、それは洗ふやうな赤貧と不遇との生涯であつた。彼は靴がなくて外へ出られなかつたりした。「私は殆ど乞食のやうだ」と、彼はいつてゐる。或有名な曲の出た時などには、僅か七册しか賣れなかつた。

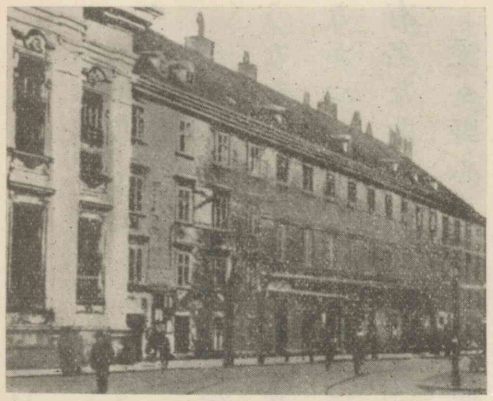
愛も野心も去つた後、彼に殘されたものはたゞ力だけであつた。その力のよろこびと、これを表現する必要とが彼を占領した。一八一二年、彼を見た一人は、「どんな皇帝でも、曾て彼のやうに自分の力を意識しはしなかつた。」といつた。

當時、或者は彼の曲をさして、「醉漢の音樂だ」といつた。たしかに醉漢の音樂だ。併し、彼は自らかういつた。「俺は、人類のために喜

バッカス　ギリシヤ神話中の酒の神。

びの神酒の口を開けてやるバッカスだ。俺は精神の聖狂を人間に與へる醉漢だ。」と。

彼はナポレオンを見てからかういつた。「俺が音樂の術を知つてゐるやうに戰術を知つてゐれば、彼に教へてやるものを。」と。彼の容貌はナポレオンによく似てゐた。殊に、その意志を現す引締まつた口元が。



ベートーヴェンの終焉の家（ウイナン）

この「未來の人道」を目的としてその一生を捧げた偉大な靈は、一八二七年、五十七歳を一期として安らかな往生を遂げた。彼は息を引取る前に、自分の一生を顧みてかういつた、「喜劇の終り」と。その日は殊に嵐が劇しかつた。二月の寒い空には雪ふゞきがして。

リヤ王　シェークスピヤ作の戯曲中の主人公。

「悲しみを經ての喜び！」彼ほど聖い喜びに憧れた者はなかつた。彼は悲慘な生活のどん底から、未來の人類の爲に「喜悅」の福音を歌はうと思つた。彼は幾度かためらひ、幾度か失敗した後で、たうとう晩年にその希望を實現した。「第九交響樂」といふのがそれである。

その曲の中途に於て、オーケストラが急に停つたかと思ふと、深い神祕な沈默がやゝ暫く續く。そして、「喜悅」の神が優しい靜かな歩みを以て、人の心の悲しみを見舞ふ。次第々々にそれが我等の全身を占領し、やがて狂熱の形に變る。そして、嵐の中のリヤ王のやうな狂暴に移つた後で、それがまた靜かな宗教的法悅の境に入り、最後は聖愛の無我鄕で曲が結ばれる。

何がかやうな勝利と並ぶことが出來るか。史上に特筆される戰勝も、この永世の凱歌の前には、はかない一場の夢ではないか。

偉大な生の熱愛者！　彼の口からは常に喜悦の聲が洩れた。不幸が彼の命を奪はうとしたその日でさへ「おゝ、かうも美しい人生よ」と。また、「私は千たび繰り返して、私の生を住みたいと思ふ。」と。

苦しむ者よ、苦しむ力のあるものよ。汝のためには、この偉人の一生ほど好い慰安と刺戟とはない。彼は、自分が悲慘の頂點にゐる時でさへ、彼の實例が、後世の苦しむ者のために助になることを望んだ。そして、かういつた。「憐むべき忍苦者は、己と同じやうな一人の人間――あらゆる自然の障害にもかゝはらず、男らしい男になるために、その全力をつくした一人の人間――をこゝに見出して、慰安を感ずるであらう。」と。

（嵐の前）

河井醉茗
名は又平。詩人。堺市の人。明治七年生。

一三　歩いた途

河井醉茗

私の歩いたあとには
花が咲いた。
私の歩いたあとには
泉が湧いた。

私の歩いた時は
荊棘（いばら）の途であつたが
私の歩いた時は
石くれの道であつたが。

こんな美しい花が

咲かうとは思はなかつた。
こんな清らかな泉が
湧かうとは思はなかつた。

ただ一歩一歩省みて
靜かに歩いた。
ただ一瞬一瞬心から
踏みしめて歩いた。

私はやはり
いい途を歩いたのだらう。
荊棘の刺にもさされたけれど——
石のかけらにも躓いたけれど——

（紫羅欄花）

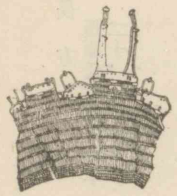
平治物語　作者不詳。平治の亂の顚末を記した戰記物語。

十二月　平治元年（一一五九）十二月。

勸修寺左衞門督光頼　藤原氏。桂大納言といふ。この時年三十六。承安三年（一一七三）歿、年五十。

信頼　藤原氏。光頼の甥。この時年二十七。

腹巻　胴をば脊で合はせるやうに造つた一種の鎧。輕便なところから着物の下に着る隱し鎧として用ひられた。



一四　光頼の參内

平治物語

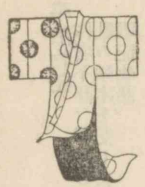
内裏には、十二月十九日公卿僉議とて催されたり。勸修寺左衞門督光頼卿、このほどは「信頼卿の振舞過分なり。」とて、不參におはしましけるが、「參内して承らん。」とて、殊にあざやかに束帶引繕ひ、蒔繪の細太刀をおとなしやかに佩き給ひ、乳母子の桂右馬允範能に、膚に腹巻着せ、雜色の裝束に出で立たせ、「自然のこともあらば、人手に懸くな、汝が手に懸けて光頼が首をば急ぎ取れ。」とて、御身近く置き、その外清げなる雜色四五人召具して、大軍、陣を張りて處々門々を固く守護しけるを事ともせず、前高らかに追はせて入り給へば、兵どもも大いに恐れ奉り、弓をひらめ矢をそばめて通し奉る。

紫宸殿の後を經て、殿上を廻りて見給へば、信頼卿一座して、その座の上蔦達みな下にぞ着かれたる。光頼卿、こは不思議のことか

長方　藤原氏。この時年二十。

母方の叔父
顯頼
光頼
惟方
女（忠隆の室）―信頼

束帯


下襲

な。人はいかに振舞ふとも、あれは右衛門督、われは左衛門督なれば、下には着くまじきものをと思はれければ、左大辨宰相長方卿末座の宰相にておはしましけるに、「今日の御座席こそ餘りにしどけなう見え候へ。」と色代して、しづ〳〵と歩み、信頼卿の上にむずと着き給ふ。光頼卿は信頼卿の爲には母方の叔父なる上、大力の剛の人なれば、殊に恐れて見えられけり。右の袖の上に居懸けられて、伏目になりて色を失はれければ、着座の公卿あな淺ましと見給ふに、光頼卿下襲の尻引きなほし、衣紋つくろひ、笏取りなほし、氣色して、「今日は衛府督が一座すと見えて候、召に參ぜざらんものをば死罪に行はるべしとやらん承りて參内するところなり。そもそも何事の御諚ぞ。」と問はれけれども、信頼卿物も宣はず、着座の公卿も一言の返答なかりければ、まして僉議の沙汰もなし。

程經て、つい立ちて、「惡しう參つて候ひけり。」とて、しづ〳〵と歩

頼光　源満仲の長子。大江山の山賊退治で有名な人。

頼信　頼光の弟。平忠常の亂を平げた人。

み出でられけり。

庭上に充ち満ちたる兵どもこれを見奉りて、「あはれ、この殿は大剛の人かな。去んぬる十日より多くの人出仕し給ひつれども、右衛門督殿の座上に着く人一人もおはしまさざりつるに、仕出したることよ。門を入り給ふより、いさゝかも臆したる體も見え給はず。あはれ、この人を大將として合戰せば、いかばかりか頼もしからん。」と申せば、傍なるもの、「昔、頼光・頼信とて源氏の名將おはしまし。その頼光を打返して光頼と名告り給へば、これも剛にましますぞかし。」といへば、また傍より、「なぞ、その頼信を打返して信頼と附き給ふ右衛門督殿は、あれほどの臆病におはします。」といへば、「壁に耳、天に口といふことあり。恐し、〳〵、聞かじ。」といひながら、皆忍び笑に笑ひけり。

光頼卿かやうに振舞ひ給へども、急ぎても出でられず、殿上の小

荒海の障子
清涼殿の東の廂の間の北端にある布の障子。荒海の巖の上に手長足長の怪物の居る所を畫いたもの。

惟方
藤原氏。檢非違使別當。この時年三十五。

少納言入道
藤原通憲。卽ち入道信西。

神樂が岡
京都の東北郊外にある。

蔀の前、見參の板たからかに踏みならして立たれたりけるが、荒海の障子の北、萩の戸の邊に弟の別當惟方のおはしけるを招き寄せ、のたまひけるは、「公卿僉議とて催されつる間參じたれども、承り定めたることもなし。まことやらん、光頼も死罪に行はるべき人數にてあなる。傳へ承るごときは、その人みな當時の有職、然るべき人どもなり。その内に入らんこと甚だ面目なるべし。さても、先日右衞門督が車の尻に乘りて、少納言入道が首實檢のために、神樂が岡へ向はれしことは如何。以ての外然るべからざる擧動かな。近衞大將・檢非違使別當は他に異なる重職なり。その職にゐながら、人の

荒海の障子

勸修寺内大臣
藤原高藤。

三條右大臣
高藤の子定方。

英雄
英雄家の略。公卿の家格の名で、清華とも稱し、攝家の次。

熊野參詣
この時清盛は重盛とともに熊野參詣の途中にゐた。

切目の宿
切目は紀伊國日高郡にある村。こゝに切目の王子といふ社がある。清盛は十二月四日出立、十日切目に宿して六波羅の急報に接した。

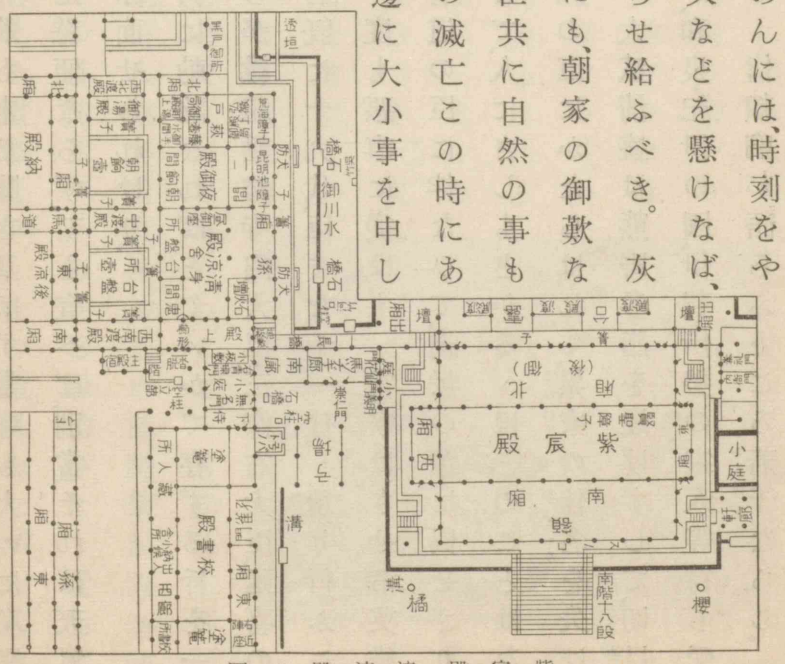
車の尻に乘り給ふこと、先蹤も未だ聞き及ばず、當時も大いに恥辱なり。就中首實檢は甚だ穩便ならず。」と宣へば、別當「それは天氣にて候ひしかば。」とて、赤面せられけり。

光頼卿重ねて「こは如何に勅諚なればとて、いかで存ずる旨を一議申さざるべき。われらが曩祖勸修寺内大臣・三條右大臣、延喜の聖代に仕へてより以來、君既に十九代、臣また十一代。承り行ふことは皆これ德政なり。一度も惡事に從はず。當家はさせる英雄にはあらざれども、偏に有道の臣に伴なひて、讒佞の輩に與せざりし故に、昔より今に至るまで、人にさしもどかるゝほどのことはなかりしに、御邊始めて暴惡の臣にかたらはれて、累家の佳名を失はんことを口惜しかるべし。大貳清盛は熊野參詣を遂げずして、切目の宿より馳せ上るなるが、和泉・紀伊の國、伊賀・伊勢の家人等待ち受けて、大勢にてぞあんなる。信頼卿が語らふところ若干ならじ。

主上
二條天皇。

平家の大勢押寄せて攻めんには、時刻をや廻らすべき。若しまた火などを懸けなば、君もいかでか安穏に渡らせ給ふべき。灰燼の地となりたらんだにも、朝家の御歎なるべし。いかに況や君臣共に自然の事もあらば、天下の珍事、王道の滅亡この時にあるべし。右衛門督は御邊に大小事を申し合はすとこそ聞ゆれ。

相構へて相構へて隙を窺ひ、玉體恙なくおはしますやうに思案せらるべし。さて主上はいづくにおはしますぞ。」「黒戸の御所に。」「上皇は。」「一本御書所に。」「内侍所は。」「溫明殿に。」「劍璽はいづくに。」「夜のおとゞに。」と、左衛門督次第に尋ね給ひければ、別當かくぞ答へられける。また「朝餉の方に人音のし、櫛形の穴に人影のしつるは何者ぞ。」と宣へば、「それには右衛門督住み給へば、その方ざまの女房などぞ影ろひ候らん。」と申されければ、光頼卿聞きもあへず、「世の中は今はかくござんなれ。主上の渡らせ給ふべき朝餉には信頼住み、君をば黒戸の御所に遷し參らせたり。末代なれども流石に日月は未だ地に墮ち給はぬものを、天照大神・正八幡宮は王法をいかに守り給ひぬるぞ。異國にはかやうの例あり



紫宸殿・清涼殿の圖

黒戸の御所
清涼殿より弘徽殿へ通ふ北の廊で黒戸の廊ともいふ。

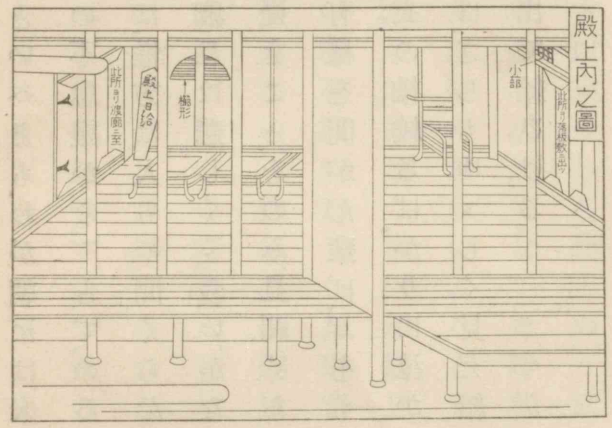
上皇
後白河上皇。

一本御書所
普通世に行はるゝ書籍一本を別に寫して天皇に奉つたのを納めておく所。

溫明殿
紫宸殿の東北内侍所を奉安する所。

夜のおとゞ
清涼殿の中央主上の夜御寢の所。

朝餉
主上が女房に給仕させて略式の御膳を召上る所。



許由　支那の堯帝の時の隱者。堯が天下を讓らうとするのを辭し、俗事を聞いて耳が汚れたといつて耳を潁水で洗つた。

といへども、わが朝には未だかくの如き先蹤を聞かず。前代未聞の不思議かな。」とて、のろ〳〵しげに憚るところなく口說き給へば、惟方は人もや聞くらんと、よにすさまじげに立ちにけり。光頼卿且は悲しくて、「我いかなる宿業によりてかゝる世に生まれ會ひ、憂きことをのみ見聞くらん。昔の許由にあらねども、今の內裏の有樣を聞かん輩は、耳をも目をも洗ひぬべくこそ侍れ。」とて、上の衣の袖絞るばかりに泣かれけり。信頼の座上に着かせられし時は、さしもゆゝしく見え給ひしが、君の御事を悲しみて、打萎れてぞ出で給ひける。

芳賀矢一　文學博士。國文學者。福井市の人。昭和二年歿、年六十一。

一五　尊皇の精神

芳賀　矢一

我が國民の皇室に對して厚い忠誠の念を持つてゐることは、上古以來少しも變らぬ。武家時代、大權の下に移つたのを見て、全く尊皇心が無くなつた時代と思ふのは皮相の見に過ぎぬ。外人などは往々さういふことを言ふ。これは自分等の國柄から考へるからである。權臣が寵恩に慣れて專横な政をしたり、將軍が兵馬の權を握つたりした事實は、國史の上では勿論面白くない現象に相違ない。併し、其の間は賴三樹三郎が歌つたやうに「天邊ノ大月、光明ヲ欠ク」の時代で、言はば浮雲が天日を蔽うたのである。決して本來の日が無くなつたのではない、天下の人は皆天日の空にあることを知つて居つたのである。兵馬の權を掌握した公方樣でも、やはり天皇の臣下で、天皇から爵位を戴いて居ることを知つて

居つた、天皇の御代理として國民の上に立つて居ると信じて居つたのである。天皇が政治からお離れになつても、天皇の御威光は少しも衰へては居らぬ、却つて益〻神聖なものと見上げて、愈〻神と同樣に尊崇するやうになつた。公方樣を見ても何とも思はぬが、九重雲深くまします禁裏樣を拜めば、目が潰れると信じて居つた。藤原氏の攝政關白時代でも同樣で、幼冲の天子を擁立し奉りて、攝關が政權を恣にしても、皇室の尊嚴なることは少しも變らぬ。攝關時代も、武家時代も、そこに何等の差別は無い。攝政や、關白や、將軍や、彼等自身も亦政權を握つては居るが、皇室を尊敬し奉るの念を、失はず、朝廷の恩寵を笠に着て、下に號令したのである。西洋人は國史を見ても、其の皮相を見るのみであるから、武家時代は國民が全く朝廷を忘れた時代かと早合點する。久しく日本に居て、日本文學に通曉して居るチャンバレーン氏でさへ、やはりさう信じて

チャンバレーン　我が國に西洋言語學を傳へ、又我が國文學を研究した英人（西紀一八五一―一九二三）。

居る。それで德川以來起つて來た水戸の尊皇論、國學者の愛國論を以て、一旦廢れたものの復興のやうに考へ、今の教育は全くミカド崇拜を教へる爲に爲政者が工夫したもののやうに論じて居る。焉んぞ知らん、我が尊皇心は、攝關時代も、武家時代も、一貫して國民の間に磅礴して居つた事を。そは藤田東湖の正氣の歌に、

神州誰カ君臨スル　萬古天皇ヲ仰グ
皇風六合ニ洽シ　明德太陽ニ侔シ
世ニ汚隆無キニアラズ　正氣時ニ光ヲ放ツ

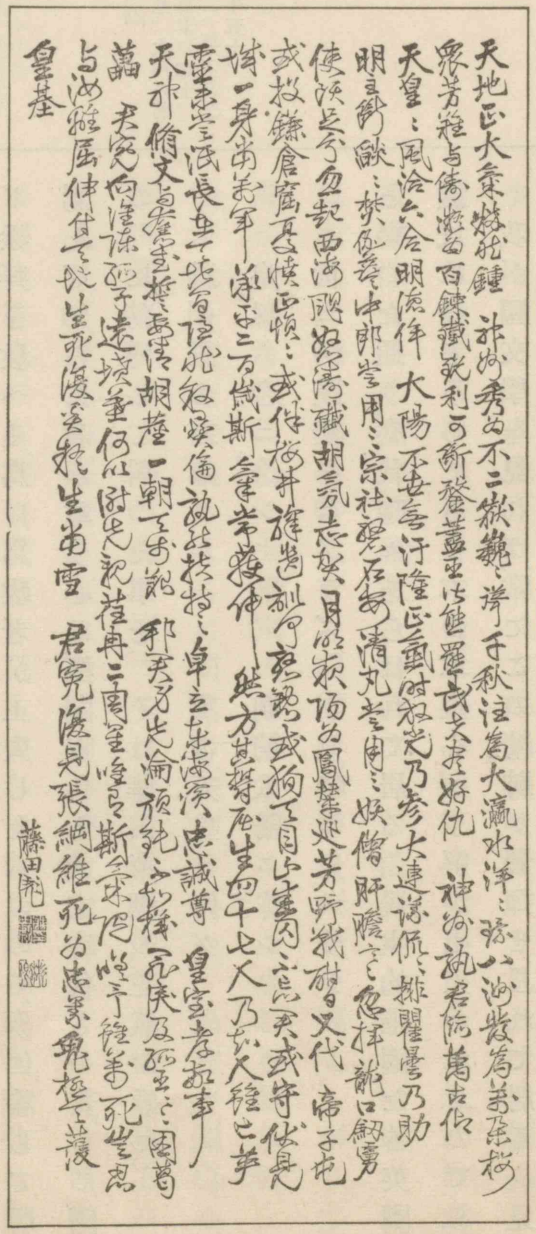
といつた通り、歷代時々あらはれて居る。民主的王國たる英國の國民にはどうしても日本の尊皇心は了解が出來かねるのである。

我が國文學を見れば、常にこの精神が發揮せられて居る。見よ、上代の祝詞は祭祀の文學にして、卽ちマツリゴトの詞である。柿本人麿の長歌は更に之を抒情歌に應用して、奈良時代の雄大な

藤田東湖　名は彪。水戸の藩士。幕末の志士。安政二年（一八五五）歿、年五十。

柿本人麿　持統・文武兩天皇の朝に仕へた歌人。

長歌を成し得たもので、常に神代より說き起し、山川もよりて仕ふる大君と歌つたのである。和歌を基礎として起つた平安時代の



藤田東湖自筆正氣歌

物語・日記は、つまり朝廷のみやびを寫し、其の儀禮を記載したものである。紫式部にしても、清少納言にしても、低い身柄でありながら、身は月卿・雲客と伍して至尊に近く侍つた名譽を筆述したのである。之を無上のほまれと思惟して、宮中の見聞を記載したのである。然るべき人の女などは、禁中に宮仕されるがよいといひ、宮中の御模樣を見ては、常に有難涙のこぼれることを敍して居る。枕草子は全部が其の時代の懷舊談である。これ等の書物の讀者も亦、之によつて宮中の模樣を餘所ながら覗ひ知ることを喜んで、面白く讀んだのである。延喜時代に和歌の勅撰集が始つて以來、歌人は勅撰集に其の詠の入るのを無上の名譽と感じた。歌と朝廷とは玆に全然離るべからざるものとなつた。太古から存在して、形式も言語も純日本である所が、皇室と同じである。敷島の道と稱し、葦原の道の名のあつたのも是が爲である。近世の慷慨家に歌人が多く、歌人が常に尊皇家であつた理由もこれで理解せられる。平家物語などの軍記物語、それの一轉して劇化せられた謠

御門の御位云々
徒然草の一節。

衰へたる云々
徒然草の一節。

何事も古き世のみぞ云々
徒然草の一節。

曲の類が常に神祇を尊び、皇室を崇めることはいふまでも無い。

概して厭世主義のはびこつたといふ鎌倉・吉野時代の文學にも、尊皇の思想は絶えず繰り返されて居る。

御門の御位はいとも畏し、竹の園生の末葉まで人間の種ならぬぞやんごとなき。

衰へたる末の世とはいへど、なほ九重の神さびたる有樣こそ世づかずめでたきものなれ。

などといつてある。かく朝廷を崇める思想が卽ち有職故實の學問の起つた所以である。「何事も古き世のみぞ慕はしき。」と、云ふので、平安朝の典雅なみやびをしのぶ當時の時代精神を成し、隨つて所謂擬古の文體までも起つたのである。擬古文は德川時代の國學者が作り始めたのでなく、已に鎌倉時代に起つて居る。德川時代の戲曲小說は多く武士道を主として居るので、朝廷を歌はな

いが、直接に朝廷をおとしたものは一つとして無い。況や德川時代には國學者の歌文に於ても、漢學者の詩文に於ても、尊皇を歌つたものは、時代の切迫と共に益〻多くなつて來た。之を要するに、太古から今日まで、何時の世、如何なる文學を見ても、皇室に對して不平がましい言は半句として無い。國民が朝廷を忘れたやうに見える時代はあつても、決して忘れたのではない、衷心からの尊敬心は毫も渝らなかつた。此の國土は卽ち皇室と共に存在する。諾冊の兩尊國土を產ませられて、次に天照大神を生ませられたといふ上代思想は、嚴として遺つて居るのである。

西洋では王室と國土との關係が密接で無い。外國の王族は二三百年の昔に遡れば、地方の豪族位なのが多い。それ故祖國を護れといふ事を敎へる。且大抵の國歌は、國民の自由を歌ひ、國家の繁榮を歌ふ事が主になつて居る。米國のはもとより、英吉利のル

ールーブリタニヤでも、佛蘭西のマルセーユでも皆それである。よし國王を歌ふにしても、神よ國王に幸あれと、國王以外にゴッドを考へてゐる。我が國の君が代は唯簡單に御代長久を祝してある、それが卽ち國歌である。皇室の繁榮は卽ち國家の繁榮である。而して又臣民の繁榮である。之を區別して歌ふ必要はない。

諸外國は最初から皇室と國土とが離れて居る國風である。政體が幾變遷し、主權者が幾たび新たにならうとも、國家は依然として存續するであらう。之に反して、我が日本は皇室と國土は切つても切られぬやうに結び付いて居る。皇室の御繁榮は卽ち國家の繁榮であることを知ると同時に、皇室なくして日本國もなく、日本人も存在し得られぬといふことを深く念はねばならぬ。

鴨長明
鎌倉時代の歌人。文學者。京都の人。建保四年（一八七六）歿、年六十四。

一六　ゆく川の流

鴨長明

一　うたかた

ゆく川の流は絶えずして、しかももとの水にあらず。よどみに浮かぶうたかたは、且消え、且結びて、久しくとゞまる事なし。世の中にある人と住家と、またかくの如し。

玉敷の都のうちに棟を並べいらかを爭へる、たかきいやしき人のすまひは、代々を經てつきせぬものなれど、これをまことかと尋ぬれば、昔ありし家は稀なり。あるは去年破れて今年は作り、あるは大家亡びて小家となる。住む人もこれに同じ。所も變らず人も多かれど、古へ見し人は、二三十人がうちに僅かに一人二人なり。あしたに死にゆふべに生まるゝならひ、唯水の泡にぞ似たりける。知らず、生まれ死ぬる人、いづ方より來りていづ方へか去る。ま

安元三年
第八十代高倉天皇の御代(一八三七)。

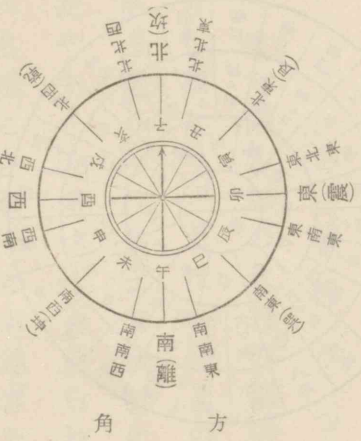
た知らず、假のやどり誰が爲に心を惱まし、何によりてか目を喜ばしむる。そのあるじと住家と無常を爭ひ去る樣、言はば朝顏の露に異ならず。あるは露落ちて花殘れり。殘ると雖も朝日に枯れぬ。あるは花は凋みて露なほ消えず。消えずと雖もゆふべを待つ事なし。

凡そ物の心を知れりしよりこの方、四十餘りの春秋を送れる間に、世の不思議を見る事、稍〻たび〳〵になりぬ。

二　安元の大火

去にし安元三年四月二十八日かとよ。風烈しく吹きて、靜かならざりし夜、戌の時ばかり都の巽より火出で來て、乾に至る。果には朱雀門・大極殿・大學寮・民部省まで移りて、一夜が程に塵灰となりにき。火元は樋口富の小路とかや、病人を宿せる假屋より出で來けるとなん。吹き迷ふ風にとかく移り行く程に、扇を廣げたるが

如く末廣になりぬ。遠き家は煙に咽び、近きあたりはひたすら焰を地に吹きつけたり。空には灰を吹き立てたれば、火の光に映じてあまねく紅なる中に、風に堪へず吹き切られたる焰、飛ぶが如くにして、一二町を越えつゝ移り行く。その中の人、現心あらんや。あるは煙に咽びて倒れ伏し、あるは焰にまぐれて忽ちに死ぬ。あるはまた纔かに身一つからくして遁れたれども、資財を取出づるに及ばず、七珍萬寶さながら灰燼となりにき。そのつひえいくそばくぞ。このたび公卿の家十六燒けたり。ましてその外は數を知らず。すべて都のうち三分が一に及べりとぞ。男女死ぬる者數千人、馬牛のたぐひ邊際を知らず。人の營み皆おろかなるなか

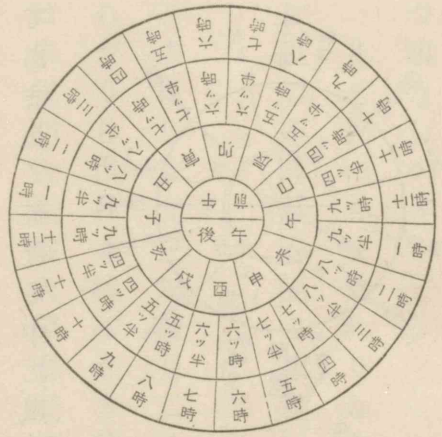


に、さしも危き京中の家を作るとて、寶を費し心を惱ます事は、すぐれてあぢきなくぞ侍るべき。

三　治承の辻風

治承四年
高倉天皇の御代(一八四〇)。

また治承四年卯月二十九日の頃、中の御門、京極の程より大きなる辻風起りて、六條わたりまで、いかめしく吹きける事侍りき。三四町をかけて吹きまくるに、そのうちに籠れる家ども、大きなるも、小さきも、一つとして破れざるはなし。さながらひらに倒れたるもあり、けた・柱ばかり殘れるもあり。また門の上を吹き放ちて、四五町がほどに置き、また垣を吹き拂ひて、隣と一つになせり。況や家の内の寶、數を盡くして空にあがり、檜皮(ひはだ)・葺板(ふきいた)の



たぐひ、冬の木の葉の風に亂るゝが如し。塵を煙の如く吹き立てたれば、すべて目も見えず。夥しく鳴りとよむ音に、物言ふ聲も聞えず。かの地獄の業風なりとも、かくこそはとぞ覺えける。

四　都うつり

また同じ年の六月の頃、俄に都うつり侍りき。いと思ひの外なりし事なり。おほかたこの京のはじめを聞けば、嵯峨天皇の御時都と定りにけるより後、既に數百歳を經たり。ことなる故なくて、たやすく改るべくもあらねば、これを世の人たやすからず憂へあへる樣、ことわりにも過ぎたり。されど、とかく言ふかひなくて、御門よりはじめ奉りて、大臣・公卿悉く移り給ひぬ。世に仕ふる程の人、誰かひとり故郷に殘り居らん。官位に思ひをかけ、主君の蔭を頼む程の人は、ひと日なりとも疾く移らんとはげみあへり。時を失ひ、世にあまされて期(ご)する所なき者は、愁へながら留りゐたり。

都うつり
福原遷都。
嵯峨天皇の御時云云
平安奠都は桓武天皇の延暦十三年(一七九四)であるからここは作者の思ひ誤りである。
御門
高倉天皇。

軒を爭ひし人のすまひ、日を經つゝ荒れ行く。家はこぼたれて淀川に浮かび、地は目の前に畑となる。人の心皆改りて、唯馬鞍をのみ重くす。牛車を用とする人なし。西南海の所領をのみ願ひ、東北國の莊園をば好まず。

その時おのづから事の便りありて、津の國今の京に至れり。所の有樣を見るに、その地程せばくて、條里を割るに足らず。北は山に沿ひて高く、南は海に近くて下れり。浪の音常にかまびすしくて、潮風殊に烈しく、内裏は山の中なれば、かの木の丸殿もかくやと、なか〳〵樣かはりて、優なる方も侍りき。日々に壞ちて、川もせに運び下す家、いづくに作れるにかあらん。猶空しき地は多く、作れる屋は少し。古京は既に荒れて、新都は未だ成らず。ありとしある人、皆浮雲の思ひをなせり。もとよりこの所にゐたる者は、地を失ひて憂へ、今移り住む人は、土木のわづらひある事を歎く。路の

御殿に茅を葺き云云　堯帝。

煙の乏しき云々　仁德天皇。

ほとりを見れば、車に乘るべきは馬に乘り、衣冠・布衣なるべきは直垂を着たり。都の手ぶり忽ちに改りて、唯ひなびたる武士に異ならず。これは世の亂るゝ瑞相とか聞きおけるもしるく、日を經つつ世の中うき立ちて、人の心も治らず、民の憂遂に空しからざりければ、同じ年の冬、猶この京に歸り給ひにき。されど壞ちわたせりし家どもは、いかになりにけるにか、悉くもとの樣にも作らず。

ほのかに傳へ聞くに、古の賢き御代には、憐みをもて國を治め給ふ。即ち御殿に茅を葺きて、軒をだに調へず、煙の乏しきを見給ふ時は、限りある貢物をさへゆるされき。これ民を惠み、世をたすけ給ふによりてなり。今の世の中の有樣、昔になぞらへて知りぬべし。

（方丈記）

一七　世界の四聖

高山樗牛

高山樗牛
名は林次郎。文學博士。山形縣の人。明治三十五年歿、年三十二。

一

生まれて一代の宗師となり、死して百世の儀表となる。聖人にあらずんば、誰かこれを能くせんや。釋迦・孔子・ソクラテース・キリストの四人、世呼んで世界の四聖とたゝふるは宜なるかな。

釋迦は西暦紀元前凡そ五百年の頃、印度伽毘羅國の王家に生まる。父は淨飯王、母は麻耶夫人、その本名を悉達多といふ。釋迦は伽毘羅王家の族名にして、佛陀はその出家成道後の尊號なり。釋迦、身は一國の太子に生まれけれども、夙に思ひを人生の問題に潛め、二十九の歳、その妻子を捨てて王城を逃れ、山林に隱れて、道を修むること六年、遂に人生の奥義を究め、無上の正覺に徹底せり。爾來五十餘年の間、中天竺の各地に巡錫して教化を布き、年八十餘歳にして跋提河の邊に歿しぬ。今の佛教は卽ち釋迦一代の教訓に基づく。蓋し釋迦の當時、印度には幾多の哲學ありき。されど、徒らに思索の高遠を欽びて、人生の疑問に適切ならず。偏に幽玄なる談理と慘澹たる苦行とによりて安心の道を求めたり。その流派を樹てて相爭ふところは、畢竟名目の優劣のみ。未だ一世の元々をして、歸命の大道に就かしむるに足らず。釋迦この間に生まれ、その浩大なる慈悲と無邊なる智慧とを以て一世の木鐸となり、民をしてその歸依するところを知らしめたり。

出山釋迦圖
（狩野芳崖筆）

孔子、名は丘、孔子はその尊稱なり。今を去ること二千四百餘年

の昔、支那の魯國に生まる。幼にして學を好み、禮を習ふ。壯年の頃より魯國の官吏となり、傍ら子弟を教へて夙に令聞あり、學德愈〻進む。魯の定公の時に至り、擢でられて大司寇の職に就く。治績大いに擧り、內外その風采を想望す。

孔子

當時の支那はいはゆる春秋戰國の亂世なり。周の王室は名のみにして、君臣の大義は蕩然として地を拂へり。或は臣にしてその君を弑する者あり、或は子にしてその親を害する者あり。强は弱を食み、大は小を併せ、權力の外に道義あるなし。教化の陵夷、風俗の頽廢、未だ曾てこの時の如きはあらず。孔子すでに志を魯に得ず、乃ち慨然として故國を出で、大義名分を天下に唱へて、狂瀾を既倒に廻らさんとす。志や高且大なりと謂ふべし。かくの如くにして四方を漂浪すること十三年、時非にして道容れられず、世また耳を名教に傾くる者なし。こゝに於て已むを得ず、老脚蹉跎として再び魯に歸り、歎じていはく、「嗚呼、吾が道遂に窮す。世遂に吾を知るものなきか。」と。門弟子貢慰めていはく、「何ぞ夫子を知るものなからんや。」孔子答へていはく、「天を怨みず、人を尤めず、下學して而して上達す。我を知るものはそれ天か。君子は歿して名の稱せられざるを病む。吾が道行はれずんば、吾何を以てか後世に見えんや。」と。後幾ばくもなくして歿す。時に七十三。

ソクラテースはギリシヤのアゼンス府に住める一彫刻師の子なり。その生まれたるはおよそ紀元前四百七十年の頃にして、釋

迦・孔子と年をへだつること二三十年に過ぎず。東西の聖人殆ど時を同じうして世に出でたるは奇なりといふべし。ギリシヤの當時は所謂詭辯學派の跋扈せし時代にして、知識は名目の爭に止まり、道德は空文の上にのみ貴ばれたり。その狀なほ釋迦當時の印度の如く、學問は人生社會の實際に關して、殆ど裨益するところなかりき。ソクラテースは慨然として時弊の救濟を以て自ら任じ、盛んに道を講じ、理を談じ、諄々として倦まず。詭辯學者の輩に遇へば、則ちその獨得の論法を以て辯難攻擊して一歩も假借せず。侃諤の正義その稀代の雄辯と相伴なひて一世を風靡せり。

然るに、「喬木は風に折らる。」と、いふ喩に漏れず、群小のソクラテースに快からざるもの、相計りて國法に背けるものとしてソクラテースを讒訴せり。その訴狀にいはく、「ソクラテースは國教を信ぜずして異教を叛め、以て人心を惑亂せり。宜しく國法によりて

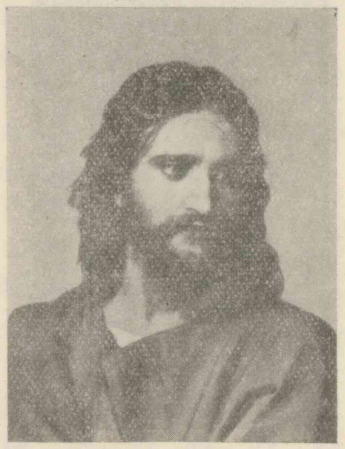
死刑に處すべし。」と。ソクラテースがこの讒訴に對する抗議は實に壯快を極めたるものにして、慨世憂國の至誠を以て國民に訴ふるところ、語々百世の眞理ならざるはなし。然れども判官はソクラテースを以て傲慢不遜なりとし、死刑を宣告せり。ソクラテース泰然として驚かず、いはく、「命のみ。」と。

ソーテラクス

ソクラテースの獄中にあるや、常に門弟子を集めて、生死・靈魂・未來の事を說き、人の脫獄を勸むるものに對しては、輒ち答へていはく、「予はただ正義に導かれんのみ。死又何するものぞ。人生の幸福は靈魂の上に在るを知らずや。」と。終に從容として毒を仰いで歿す。將に歿せんとするや、弟子、遺言を求む。ソクラテースいはく、「爾一

アスクレピアスの神　ギリシヤの醫藥の神。

鷄を以てアスクレピアスの神に捧げよ。」と。蓋し、嘗て病みし時、平癒を祈りて謝を致すことを忘れしが爲ならん。ギリシヤの聖人ソクラテースはかくの如くにして逝きぬ。年七十。



キリスト

キリストは本名をヤソといふ。キリストとは「膏灌がれたる者。」といふ義にして、教徒の奉れる尊稱なり。ユダヤのベツレヘムに生まる。西暦紀元第一年はその生後四年目に當れり。父はヨセフと呼べる賤しき木匠にして、母の名をマリヤといふ。長じて三十歳の頃、豫言者ヨハネの洗禮を受けて、始めて傳道の生涯に入り爾來三年の間、ユダヤの各地を歷遊し、諸の迫害に屈せずして、その福音を傳へたり。

抑、當時はローマ帝國の榮華、正にその極に達し、禍亂の萌芽その中に胚胎し、災異荐りに至りて、天下寧日なし。殊にキリストの故國なるユダヤは、久しく暴君の收斂に疲れ、異邦人の侮慢を被れり。民衆は徒らに珍奇なる淫祠を崇拜して、益〻放縱の俗に流れ、學者は詭辯を弄し形式に拘泥して、空しく人を惑はすのみ。こゝに於て、一世の人心は悉く偉人の現出して、この暗黑の社會を照破せんことを渴望せり。キリストこの間に生まれ、自ら救世の使命を負へる神の子なりと稱し、昂然としてその偉大なる新教理を宣傳するや、遠近靡然としてこれに赴く。僧侶・學者・官吏等はこれを喜ばず、以て猥に新法異說を唱へて、民を迷はすものなりとなしキリストを捕へて磔殺の刑に處す。キリスト豫めこの事あらんを慮り、晏然として騷がず、靜かに祈りていはく、「神よ、彼等を宥せ。彼等はその爲すべきところを知らざればなり。」と。その刑場に赴くや、路

傍に哀哭する女子を顧みていはく、「エルサレムの女子よ、吾が爲に哭くこと勿れ。たゞ己と己の子との爲に哭け。」と、かくの如くしてキリストは三十三年の短命を以て十字架上の露と消え去りぬ。キリストの死後、その弟子は激烈なる迫害に抵抗して、その教を天下に弘む。キリスト教卽ちこれなり。

二

以上は四聖の略傳なり。その人物・事蹟の高大にして雄偉なる、永く後人の景慕し、崇拜すべきところなり。四聖の中、釋迦を除きては、いづれも轗軻不遇の中にその生を終へたり。孔子は志を四方に得ず、その經綸を抱いて空しく詠歎の間に歿せり。ソクラテースとキリストとはいづれも讒奸の手に罹り、或は毒を仰ぎ、或は盜賊と並びて十字架上に磔せられたり。慘澹たりと謂ふべし。然れどもこれ等の人々の志すところは天下後世に在り、現世の禍

福と一身の安危とは、毫もその顧慮するところにあらず。故にその死に就くや、晏如としてなほ歸するが如し。孔子はその一身の不幸を憂へずして、却つて「吾が道行はれずんば、吾何を以てか後世に見えん。」と、嗟歎せり。釋迦は衆生の爲に、その妻子と王位とを抛ちて、食を路傍に乞へり。ソクラテースは死罪の脅迫に遇うて、揚言していはく、「正義を信ずるものにとりて、死はた何するものぞ。吾をして一日の生あらしめんか、その一日卽ち國民の迷をさまさざるべからず。」と。キリストは己を罪に陷るゝものの爲に神に祈りたり。嗚呼、何ぞその慈悲の浩大にして無邊なるや。

四聖はその生まれたる所と時とを異にす。故にその教理にも亦多少の差違なきを得ず。今その要略を擧ぐれば左の如し。

釋迦の教理は煩惱を斷滅して、涅槃に達するを主旨とす。それ人生は苦に始りて苦に終る。生・老・病・死いづれか苦に非ざるべき。

故に吾人は現世を苦界と觀ぜざるべからず。而して苦の原因は情慾に在り、情慾の原因は、「我」の一念に執着するに在り。故に吾人は「我」の一念を脱却して、無我・無心の境界に達せざるべからず。これ人生究竟の樂地にして、涅槃卽ちこれなり。

孔子の教は、身を修め、家を齊へ、國を治め、天下を平かにするに在り。而して身を修むる基は孝に在り。故に孝は百行の本なり。君臣の義・父子の親・夫婦の別・長幼の序・朋友の信皆これに本づく。人は生まれながらにして、美德を天に稟くれども、後天の氣質によりて、これを完うすること能はざるもの多し。教育の要、こゝに於てかあり。すでに教育を受けて、身すでに修まらば、家自ら齊ふべく、家齊はば、國自ら治まるべく、國治まらば、天下自ら太平なるを得べし。故に孔子の教は、一身の修養に始り、治國平天下に終るものと見るを得べし。

ソクラテースの教はいはゆる知德合一說なり。思へらく、「眞正の知識は卽ち道德なり。故に行ふと知るとはもと一體のみ。知つて而して行はざると、行うて而して知らざるとは、ともに知識・道德の眞正なるものに非ず。眞理を確信し、その實行を以て最上の義務となさば、正義おのづからその中に在り。正義は靈魂の滿足なり。而して靈魂は肉體と異にして、不朽不滅なるものなり。故に人の正義を行ふ、現世の利害は決して顧慮すべきに非ず。道德は富貴の爲に存せず。」と。

キリストの教は愛の教なりと稱せらる。然れども、富貴は道德の中に在り。いはゆる山上の垂訓は三年傳道の極意を包括するを以て、左にその大略を擧げん。いはく、「心の貧しきものは福なるかな、天國はその人の有なればなり。悲しむものは福なるかな、その人は慰めらるべければなり。飢ゑ渴く如く義を慕ふものは福なるかな、その人は飽くことを得べけ

ればなり。憐むものは福なるかな、その人は憐みを得べければなり。心の清きものは福なるかな、その人は神を見ることを得べければなり。悪に敵することなかれ。人若し汝の右の頬を打たば、左の頬をもめぐらしてこれに向けよ。汝の隣人を慈みて、汝の敵を愛せよ。人に見せんがために義をその前に行ふこと勿れ。右の手の爲すところを左の手に知らしむること勿れ。僞善者の行に倣ふこと勿れ。隱れたるを鑑み給ふ神は、顯に報い給ふべければなり。人は神と財とに兼ね事ふること能はず。人を是非すること勿れ。人の目にある塵を見ながら、何ぞ己が目にある梁木（うつばり）を見ざる。汝等求めよ、然らば與へられん。尋ねよ然らば遇はん。叩け然らば啓かれん。窄き門より入れ。沈淪に到る門は、其の路大きく、これに入るものは多し。嗚呼いかに生命に到る門は窄く、その路は細く、これをうるものの少きぞや。凡そこの訓を聽きて

行ふものは、磐の上に家建てたる智者の如く、聽けども行はざるものは、沙上に屋を架せる愚人の如し。」と。キリスト教の精髄は、後世の人いかなる色彩を加ふとも、畢竟この山上の垂訓を出でず。

かくの如きは四聖の傳記及び教義の大要なり。嗚呼、四聖逝いてすでに幾千年ぞ。而してこの教の今なほ凜々として生氣あるを見よ。世界累代の幾億兆の民衆は、この教に憑りてその道念を養ひ、その安慰を求む。四聖の如きは實に人類の永遠の救濟者なりと謂ふべし。その遺德の高大なること何を以てかこれに比せんや。

（糎牛全集）

和辻哲郎
文學博士。哲學者。東京帝國大學教授。兵庫縣の人。明治二十二年生。

一八　心と言葉

和辻哲郎

心と心とを觸れあはせるには、言葉だけに賴ることは出來ぬ。言葉は不完全なものである。二つの心の緊張が高まつて、その間にそこばくの隔りが感ぜられるやうな場合には、特にこの不完全が目立つて來る。思ふことを單純に現したつもりでも、相手がまるで異なつた方向に刺戟を受けることは珍しくない。觸れ合はうとする心は、いつまでも言葉の奧にちゞこまつてゐて、中心を離れた問題の上に、いらだたしい神經と我執とを衝突させるのである。興奮の度が強まれば強まるほど、言葉の不完全が產みだすこの葛藤は烈しくなるやうに思はれる。

しかし、この不完全な言葉を使つても、心が何のこだはりもなくすなほに向ふへ通ずることもある。時には、その言葉の必要さへ

ない。それが、言葉の上の詳しい說明や了解を必要とするはずの場合においてもさうなのである。

だから、言葉によつて心を通ずることは出來ぬといひきるわけにはゆかない。しかしまた、言葉で說明しさへすれば、心は通ずるものだといひきることも出來ぬ。

心が通ずるのは、心の論理がとほつてゐるからである。頭の論理がいかに正確に言葉の內に現れてゐても、心の論理がとほつてゐなければ、人の心を承服させるわけにはゆかない。

例へば、或人の行爲に對して、非難の心持を經驗するとする。その行爲の正しくないことを指摘して、それを改めさせるのは確かにいゝことである。しかし、その行爲の正しくない所以をいかに明白に說明して聞かせても、それが頭の論理で押しつめられてゆく間は、相手は決して承服するものでない。こちらの立場から相

手の行爲を不正と判斷しても、相手は相手の立場で何かしら辯解をもつてゐる。その辯解を悉く說き破つたところで、相手の心は反撥の力を强めるばかりである。純粹に理論の問題を討議するやうなぐあひには決してゆくものではない。

それは人間の行爲が、その人の性格や氣質に根ざしてゐるからである。當人にも、頭の論理だけで、自分の行爲を支配することは出來ない。彼が道德的反省によつて、自分の行爲を制御しようとする場合には、著しく自分の心の論理に賴つてゐる。それゆゑに、他から頭の論理で押詰められても、それによつて行爲を改める情熱が湧いて來るはずはないのである。むしろ、彼の性格や氣質に對して十分同感してくれない相手の心情や、論理的に自分の立場を覆さうとする相手の征服慾などが、問題の焦點たる不正の指摘よりも、遙かに强い刺戟を彼に與へるのである。

たとひ、忠告者の心に正義に對する情熱が燃えてゐるとしても、またその忠告が非常に正しいことであるとしても、相手がその忠告のうちに同情を感ぜずして、たゞ征服慾を感ずるのみであるならば、忠告者の心は、終に相手の心に觸れることが出來ないであらう。忠告者が相手をよくしようとしてゐる親切な心も、かういふ場合には現れる場所がない。いかに言葉でそれを說明しても、相手の心には響かない。言葉は畢竟空である。

或心の狀態を現す言葉は、複雜な組織を土臺として現れて來る。だから同一の言葉も、それを使ふ人の人格の異なるに隨つて、それぞれに異なつた色調や倍音を伴なふ。言葉を通して、その背にある人格がにじみ出し、ひゞき出すのである。

心を現す言葉の妙味はこゝにある。それは、單なる知識の集積によつては、些かも深められるものでない。たゞ正直に、その人の

築き上げた生活を暴露する。何の假託も、虚飾をも許さない。同じ言葉を使つて同じやうな心生活を表現しようとするのは、各人の自由であるが、それによつて眞實に表現せられる心生活は、言葉が同一であるやうに輒くは同一であることが出來ない。その人が獲得した生活の高さは、いかなる場合にも、その人の言葉の内容に、或限界を與へる。キリストと同じ眞理を語ること、もしくはそれ以上に深い眞理を語ることは、二十世紀の今日では極めて容易であると考へてゐる人が、我々の眼前にいかに多いことであらう。しかしまだ何人も、キリストの如き力と愛とをその言葉からひゞき出させたものはない。貴いのは言葉でなくて、言葉の奥にひそむ心である。

（偶像再興）

烏丸光廣
姓は藤原。德川時代の歌人。寛永十五年（一三九八）歿、年六十。

さゞれ石
「我が君は千代に八千代にさゞれ石の巖となりて苔の蒸すまで。」
（讀人知らず、古今集）

忠臣云々
「忠臣不レ事二二君一、貞女不レ更二二夫一」
（史記）

一九　息女への教訓

烏丸光廣

一筆申し參らせ候。然れば、そもじ幾千代の色も變らぬ常磐木の枝を連ぬる御祝として、よそへ越し給ふべきこと、誠に目出たう覺え參らせ候。申すまでは候はねども、身持やさしく、心おとなしく、さゞれ石の巖となりて苔の蒸すまで繁昌して、孫子の末々までも御榮え候やうにと打願ひ參らせ候まゝに、筆にまかせて申し參らせ候。

第一、慈悲の心ありて人を憐み、蟲獸の上までも露の情を懸け給ひ、表はたゞ青柳の絲の風に靡くが如く物柔らかにして、人の心を酌み知り、僻める心を押直し、御嗜みなさるべく候。さてまた、心の中は石や金よりも堅く、あだなる心を持ち給はぬこと肝要にて候。「忠臣二君に仕へず、貞女兩夫に見えず。」とあれば、くれ〳〵此のこ

とわりを朝夕心に掛け給ひ候はば、神や佛の御守もおはしますべく候。

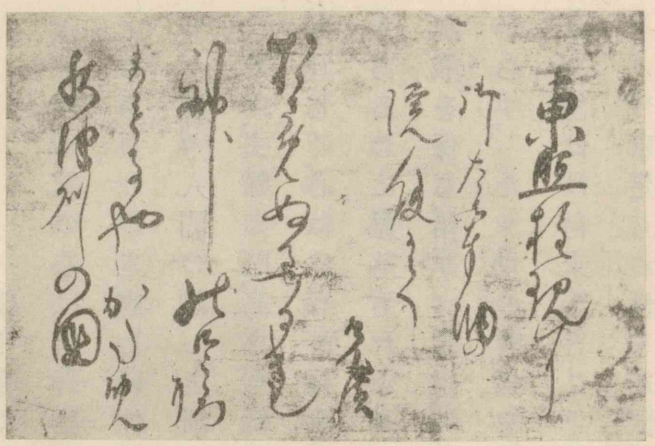
第二、まれ人など御渡り候はん時、内に無念のことの候とも、聊か其の氣色をつゆほども見せず、何となく打向ひ、春は青柳・梅・櫻・鶯・雲雀、夏は卯の花・菖蒲・橘・杜鵑・螢、秋は月・紅葉・霧・蟲・鹿、冬は雪・霜・霰・霙・鴨・鷹、いづれも其の折に觸れたる物語などして、懇に取りはやし給ふべく候。さりとて、年若き人のあまり睦じげなるも外目いかゞあるべき。たゞ何となくなぞらへて、とかくしのぎなきやうに愛々しく候はんことこそあらまほしく候へ。

烏丸光廣

第三、召使ふ人の疎略にて、何事も思ふやうになく候とも、忍びやかに喩し言をもいひ聞かせ給ふべく候。それをも聞き入れず候はば、責め誡めもあるべく候。さりとて、あるじなどの聞かせ給ふところにては口惜しく候。いかにみめ姿うるはしき兒・女房なりとも、腹を立てたる顏は見にくきものにて候。しかも若き人の聲高に怒り候體、淺ましく候。さて喩しごとをも聽くまじきものと思ひ給はば、里へ返し候はば、さのみ苦勞もあるまじく候。男も女もあまり短氣に候うては難も出來、召使はれ候ものも他所へ惡しきやうに名を立て、後には逃げ去るものにて候。

東照權現に御たち奉納の院使にて　光廣

お(を)さめぬるつるぎも神の御こゝろにまもるやかため秋津州の國



烏丸光廣の筆蹟

吉野なる云々　湯原王の歌、萬葉集にある。

吉野川　紀の川の上流。

事足らぬ云々　道歌。

吉野なるなつみの川の川淀に
　鴨ぞ鳴くなる山陰にして

と詠める歌の心は、吉野の川は早く候、鴨は水の上に住むものなれども、あまり早き處には住み難く、川淀とて水の淀む處に遊ぶとなり。況や人間の烈しき所には長らへ難く候。

第四、夫婦の間、高きも低きも睦じく候はんことこそ、他所の聞えも宜しく、心にくうも侍らめ。たとひ幾千代を送り給ふとも、聊かもあるじに見落されぬやうに朝夕嗜み候はんには、いよ〳〵千秋萬歳を保ち給ふべく候。さてまた、無念のことをもさのみ思ふべからず。たゞ世の有様をつら〳〵と見て、心をものどやかに過し給ひ候はば、行末よきことのみにてあるべく候。歌に、

事足らぬ世をな恨みそ鴨の足の
　短くてこそ浮かぶ瀬もあれ

さてまた、心に掛けて習ふべきは筆の道にて候。いかなる位高き人中にても、おめずしてしとやかに書きなしたるは、いと氣高く見ゆるものにて候。上にも下つ方にも、無手に候はば、不自由なるのみかは、其の身も賤しく成りさがるものにて候。「我・人の用に立ちなんものは、第一鳥の跡なり。」と、或書（ふみ）にも見え候まゝ、常々御稽古ありたく候。殊更和歌は家のものなれば申すに及ばず候へども、尋常に氣高く、四季に應じて御詠みあるべく候。男も女もよろづにつけて身持・心遣肝要に候。善きが上にも善きやうに願ひまゐらせ候。

あまり山鳥の尾の長々しく書き列ね參らせ候。なほ重ねく御祝の數々申し承り候べく候。めでたく、かしこ。

森鷗外
名は林太郎。文學博士。醫學博士。元陸軍軍醫總監。元帝室博物館總長。島根縣の人。大正十一年歿、年六十三。

高瀬舟
底扁平で淺水に適する小舟。

高瀬川
賀茂川の分流。更に二つに分れ、一は鳥羽にて桂川に入り、一は伏見にて淀川に入る。

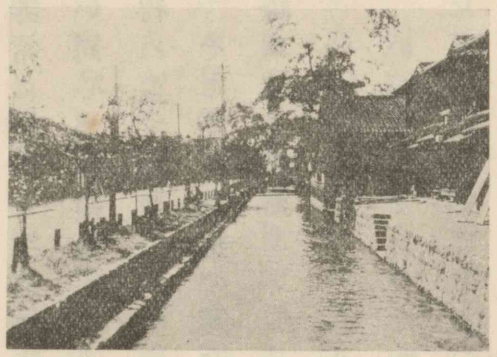
二〇 高瀬舟

森鷗外

高瀬舟は京都の高瀬川を上下する小舟である。德川時代に京都の罪人が遠島を申し渡されると、本人の親類が牢屋敷へ呼び出されて、そこで暇乞をすることを許された。それから罪人は高瀬舟に載せられて、大阪へ廻されることであつた。それを護送するのは、京都町奉行の配下にゐる同心で、此の同心は罪人の親類の中で、主立つた一人を大阪まで同船させることを許す慣例であつた。これは上へ通つた事ではないが、所謂大目に見るのであつた。默許であつた。

當時遠島を申し渡された罪人は、勿論重い科を犯したものと認められた人ではあるが、決して盜をするために人を殺し火を放つたといふやうな、獰惡な人物が多數を占めてゐたわけではない。高瀬舟に乘る罪人の過半は、所謂心得違のために、思はぬ科を犯した人であつた。

さういふ罪人を載せて、入相の鐘の鳴る頃に漕ぎ出された高瀬舟は、黑ずんだ京都の町の家々を兩岸に見つゝ東へ走つて、賀茂川を横ぎつて下るのであつた。此の舟の中で、罪人と其の親類の者とは夜どほし身の上を語りあふ。いつも〳〵悔んでも還らぬ繰り言である。護送の役をする同心は、傍でそれを聞いて、罪人を出した親戚眷族の悲慘な境遇を細かに知ることが出來た。


高瀬川

所詮、町奉行の白洲で表向きの口供を聞いたり、役所の机の上で口書を讀んだりする役人の夢にも窺ふことの出來ぬ境遇である。同心を勤める人にも、いろ〳〵の性質があるから、此の時只うる

さいと思つて、耳を掩ひたく思ふ冷淡な同心があるかと思へば、又しみ〴〵と人の哀れを身に引受けて、役柄ゆゑ氣色には見せぬながら、無言の中に私かに胸を痛める同心もあつた。場合によつて非常に悲慘な境遇に陷つた罪人と其の親類とを、特に心弱い、涙脆い同心が宰領して行くことになると、其の同心は不覺の涙を禁じ得ぬのであつた。

そこで高瀬舟の護送は、町奉行の同心仲間で、不快な職務として嫌はれてゐた。

いつの頃であつたか、多分江戸で白河樂翁侯が政柄を執つてゐた寛政の頃でもあつたであらう。知恩院の櫻が入相の鐘に散る春の夕べに、これまで類のない、珍しい罪人が高瀬舟に載せられた。

白河樂翁
松平定信。二十五頁頭註參照。

寛政
光格天皇の御代。

知恩院
京都東山にある淨土宗の本山。

それは名を喜助といつて、三十歳ばかりになる、住所不定の男である。固より牢屋敷に呼び出されるやうな親類はないので、舟にも只一人で乘つた。

護送を命ぜられて、一しよに舟に乘込んだ同心羽田庄兵衞は、ただ喜助が弟殺しの罪人だといふことだけを聞いてゐた。さて牢屋敷から棧橋まで連れて來る間、この瘦肉の、色の蒼白い喜助の樣子を見るに、いかにも神妙に、いかにもおとなしく、自分をば公儀の役人として敬つて、何事につけても逆らはぬやうにしてゐる。しかもそれが、罪人の間に往々見受けるやうな、溫順を裝つて權勢に媚びる態度ではない。

庄兵衞は不思議に思つた。そして舟に乘つてからも、單に役目の表で見張つてゐるばかりでなく、絕えず喜助の擧動に、細かい注意をしてゐた。

喜助の姐朴訥人生觀を打ち明けられた

其の日は夕方から風が歇んで、空一面を蔽つた薄い雲が、月の輪郭をかすませ、やう〳〵近寄つて來る夏の溫かさが、兩岸の土からも、川床の土からも、靄になつて立昇るかと思はれる夜であつた。下京の町を離れて、賀茂川を横ぎつた頃からは、あたりがひつそりとして、只舳に割かれる水のさゝやきを聞くのみである。

夜舟で寢ることは、罪人にも許されてゐるのに、喜助は横にならうともせず、雲の濃淡に從つて、光の增したり減じたりする月を仰いで、默つてゐる。其の額は晴れやかで、目には微かなかゞやきがある。

庄兵衞はまともには見てゐぬが、始終喜助の顏から目を離さずにゐる。そして不思議だ、不思議だと、心の內で繰り返してゐる。それは喜助の顏が縱から見ても、横から見ても、いかにも樂しさうで、若し役人に對する氣兼がなかつたなら、口笛を吹きはじめるとか、鼻歌を歌ひ出すとかしさうに思はれたからである。

庄兵衞は心の中に思つた。これまで此の高瀨舟の宰領をしたことは幾度だか知れない。しかし載せて行く罪人は、いつも殆ど同じやうに、目も當てられぬ氣の毒な樣子をしてゐた。それにこの男はどうしたのだらう。遊山船にでも乘つたやうな顏をしてゐる。罪は弟を殺したのださうだが、よしやその弟が惡い奴で、それをどんな行掛りになつて殺したにせよ、人の情として好い心持はせぬ筈である。この色の蒼い瘦男が、その人の情といふものが全く缺けてゐる程の、世にも稀な惡人であらうか。どうもさうは思はれない。ひよつと氣でも狂つてゐるのではあるまいか。いやいや、それにしては何一つ辻褄の合はぬ言語や擧動がない。此の男はどうしたのだらう。庄兵衞がためには、喜助の態度が、考へれば考へる程わからなくなるのである。

暫くして、庄兵衛はこらへ切れなくなつて呼び掛けた。

「喜助、お前は何を思つてゐるのか。」

「はい。」

といつてあたりを見廻した喜助は、何事をかお役人に見咎められたのではないかと氣遣ふらしく、居ずまひを直して庄兵衛の氣色を伺つた。

庄兵衛は、自分が突然問を發した動機を明かして、役目を離れた應對を求める分疏をしなくてはならぬやうに感じた。そこでかう云つた。

「いや、別にわけがあつて聞いたのではない。實はな、己は先刻からお前の島へ往く心持が聞いて見たかつたのだ。己はこれまでこの舟で大勢の人を島へ送つた。それは隨分いろ〳〵な身の上

の人だつたが、どれも〳〵島へ往くのを悲しがつて、見送りに來て一しよに舟に乘る親類のものと、夜どほし泣くに極つてゐた。それにお前の樣子を見れば、どうも島へ往くのを苦にしてはゐないやうだ。一體お前はどう思つてゐるのかい。」

喜助はにつこり笑つた。

「御親切に仰しやつて下さつて、有難うございます。なる程島へ往くといふことは、外の人には悲しい事でございませう。その心持は私も思ひ遣つて見ることが出來ます。しかし、それは世間で樂をしてゐた人だからでございます。京都は結構な土地ではございますが、その結構な土地で、これまで私の致して參つたやうな苦しみは、どこへ參つてもなからうと存じます。お上のお慈悲で、命を助けて島へ遣つて下さいます。島はよしやつらい所でも、鬼の栖む所ではございますまい。私はこれまで、どこといつて自分

のゐて好い所といふものがございませんでした。今度お上で島にゐろと仰しやつて下さいます。そのゐろと仰しやる所に落着いてゐることが出來ますのが、先づ何よりも有難い事でございます。それに私はこんなにか弱い體ではございますが、ついぞ病氣を致したことはございませんから、島へ往つてから、どんなつらい仕事をしたつて、體を痛めるやうなことはあるまいと存じます。それから今度島へお遣り下さるにつきまして、二百文の鳥目を戴きました。それをこゝに持つてをります。」

かういひ掛けて、喜助は胸に手を當てた。遠島を仰せ附けられるものには、鳥目二百文を遣すといふのは、當時の掟であつた。

喜助は語を繼いだ。

「お恥かしい事を申し上げなくてはなりませぬが、私は今日まで二百文といふお足を、かうして懷に入れて持つてゐたことはございませぬ。どこかで仕事に取附きたいと思つて、仕事を尋ねて歩きまして、それが見つかり次第、骨を惜しまずに働きました。そして貰つた錢は、いつも右から左へ人手に渡さなくてはなりませんだ。それも現金で物を買つて食べられる時は、私の工面の好い時で、大抵は借りたものを返して、又後を借りたのでございます。それがお牢に這入つてからは、仕事をせずに食べさせて戴きます。私はそればかりでも、お上に對して濟まない事を致してゐるやうでなりませぬ。それにお牢を出る時に、この二百文を戴きましたのでございます。かうして相變らずお上の物を食べてゐて見ますれば、この二百文は私が使はずに持つてゐることが出來ます。島へ往つて見ますまでは、どんな仕事が出來るかわかりませんが、私はこの二百文を島でする仕事の元手にしようと樂しんでをります。」

かういつて、喜助は口を噤んだ。

庄兵衛は、

「うん、さうかい。」

とは云つたが、聞く事毎に餘り意表に出たのでこれも暫く何もいふことが出來ずに、考へ込んで默つてゐた。

庄兵衛はかれこれ初老に手の屆く年になつてゐて、もう子供が四人ある。それに老母が生きてゐるので、家は七人暮しである。平生人には吝嗇といはれる程の儉約な生活をしてゐて、衣類は自分が役目のために着るものの外、寢卷しか拵へぬ位にしてゐる。しかし不幸な事には、妻を好い身代の商人の家から迎へた。そこで女房は夫の貰ふ扶持米で暮しを立てて行かうとする善意はあるが、裕かな家に可愛がられて育つた癖があるので、夫が滿足する程手元を引締めて暮して行くことが出來ない。動もすれば月末

になつて勘定が足りなくなる。すると女房が內證で里から金を持つて來て帳尻を合はせる。それは夫が借財といふ事を毛蟲のやうに嫌ふからである。さういふ事は所詮夫に知れずにはゐない。庄兵衛は五節句だからといつては、里方から物を貰ひ、子供の七五三の祝だといつては、里方から子供に衣類を貰ふのでさへ、心苦しく思つてゐるのだから、暮しの穴を塡めて貰つたのに氣が附いては、好い顏はしない。格別平和を破るやうな事のない羽田の家に、折々波風の起るのは、是が原因である。

庄兵衛は今喜助の話を聞いて、喜助の身の上をわが身の上に引比べて見た。喜助は仕事をして給料を取つても、右から左へ人手に渡してなくしてしまふと云つた。いかにも哀れな、氣の毒な境遇である。しかし、一轉して我が身の上を顧みれば、彼と我との間に果してどれ程の差があるか。自分も上から貰ふ扶持米を、右か

ら左へ人手に渡して暮してゐるに過ぎぬではないか。彼と我との相違は、謂はば算盤の桁が違つてゐるだけで、喜助の有難がる二百文に相當する貯蓄だに、こつちはないのである。

さて桁を違へて考へて見れば、鳥目二百文をでも、喜助がそれを貯蓄と見て喜んでゐるのに無理はない。その心持はこつちから察して遣ることが出來る。しかし、いかに桁を違へて考へて見ても不思議なのは、喜助の慾のないこと、足ることを知つてゐることである。

喜助は世間で仕事を見つけるのに苦しんだ。それを見つけさへすれば、骨を惜しまずに働いて、やう〳〵口を糊することの出來るだけで滿足した。そこで牢に入つてからは、今まで得難かつた食が、殆ど天から授けられるやうに、働かずに得られるのに驚いて、生まれてから知らぬ滿足を覺えたのである。

庄兵衛はいかに桁を違へて考へて見ても、こゝに彼と我との間に大いなる懸隔のあることを知つた。自分の扶持米で立てて行く暮しは、折々足らぬことがあるにしても、大抵出納が合つてゐる。手一ぱいの生活である、然るにそこに滿足を覺えたことは殆ど無い。常は幸とも不幸とも感ぜずに過してゐる。しかし心の奥には、かうして暮してゐて、ふいとお役御免になつたらどうしよう、大病にでもなつたらどうしようといふ疑懼が潜んでゐて、折々妻が里方から金を取出して來て穴塡めをしたことなどがわかると、この疑懼が意識の閾の上に頭を擡げて來るのである。

一體この懸隔はどうして生じて來るだらう。只上邊だけを見て、それは喜助には身に係累がないのに、こつちにはあるからだといつてしまへばそれまでである。しかしそれは嘘である。よしや自分が一人者であつたとしても、どうも喜助のやうな心持には

なれさうにない。この根柢はもつと深い處にあるやうだと、庄兵衛は思つた。

庄兵衛は只漠然と、人の一生といふやうな事を思つて見た。人は身に病があると、この病がなかつたらと思ふ。その日〳〵の食がないと、食つて行かれたらと思ふ。萬一の時に備へる蓄へがないと、少しでも蓄へがあつたらと思ふ。蓄へがあつても、又その蓄へがもつと多かつたらと思ふ。この如くに先から先へと考へて見れば、人はどこまで往つて踏み止ることが出來るものやら分らない。それを今目の前で踏み止つて見せてくれるのがこの喜助だと、庄兵衛は氣が附いた。

庄兵衛は今さらのやうに驚異の目を睜つて喜助を見た。この時庄兵衛は空を仰いでゐる喜助の頭から毫光(がうくわう)がさすやうに思つた。

(鷗外全集)

吉田絃二郎
本名は源次郎。小説家。早稲田大學講師。佐賀縣の人。明治十九年生。

二一 思惟するもの

吉田絃二郎

現代の若い女性たちの美點として、私は其の潑剌たる春の樣な美しさを讃へる。如何にも暢然たる其の歩調、春の芽生えのやうにすく〳〵と伸びて行く其の四肢、全身に漲つてゐる輝かな生命の希望、それは確かに來るべき明日の光明世界を我々に直感せしめないではおかぬ。確かに現代の若い女性たちは、生きてゐることの幸福を心から感じてゐるやうである。彼女等は神經の端々までも明るい現世を樂しんでゐるやうに思はれる。

現代の女性たちの外形の中には、確かに不愉快な、不調和な、蕪雜な、あくどいものがある。併しそれと同時に、若い無邪氣な現代の少女たちの、如何にも素直に、草の芽の如く自然に伸びて行く姿の中には、上代の眞の日本人の、樂天的な燃えるやうな熱情が再び蘇

つてゐるのを見出す。長い時代の間、いろ〳〵な過去の暗い思想の陰におびえてゐた女性の、無邪氣な、小鳥のやうな感受性や、明るい太陽のやうな魂が、再び我々の鄕土の上に蘇つて來たのである。かういふ現代の若い女性たちの明るい春のやうな氣分を、更にすくすくと素直に純潔に賢く伸して行くことが、女性自身の爲にも、周圍の人々の爲にも、どんなに幸福であるか知れない。私は其の意味で、今日の若い女性たちの明るい心を見ると、明日の日本の爲に祝福したい氣がする。

それと同時に、私は、其の清淨さを捨てて、其の素直な、無邪氣な明るさを傷つける、惡い意味の現代化された膚淺な、思ひ上つた、恥知らずな、人生を玩具視するやうなものを輕蔑したく思ふ。

現代の生活は、何につけ刺戟が多過ぎる。其の爲に人々はたゞ刺戟の上にのみ生きる所の一種の病人に墮してしまつた。刺戟は我々の皮膚のみにとゞまつて、我々の魂には屆かない。私たちは刹那々々に流れて行く所の刺戟のみに生きて行かうとしてゐる近代の都會病から救はれなければならぬ。私たちは屢、藝術の世界に於て「土に還れ。」といふ言葉を聽かされるが、私たちの魂もまた一度土に還されなければならぬ。

私たちは都會の刺戟的な官能の生活から、直ちに土と相接する、或は土から芽生えて來る所の魂の生活に還らなければならぬ。土に還るといふのは、自分等の生活の基礎を何處に置くべきかといふことを意識して生きることである。自分の生活の根を失つた浮草の如き生き方を捨てて、苦しくとも、寂しくとも、孤獨であらうとも、自分一人の行くべき生活の道を操守するだけの勇氣を持つべきである。

私たちは自分自身に生きることの意義を見出さなければなら

ぬ。自分自身の中に操守する所のものを持たないで踊り歌つてゐる人は、自分では拍手を浴びてゐるつもりで思ひ上つてゐるであらうが、實は周圍の人々の玩具になつてゐるのである。

若い女性たちは春のやうに快活でなければならぬ。私は此の美點に於て現代の若い女性たちは惠まれてゐることを信ずる。日本人は過去幾百年間に於て、今日のやうな明るい日本の女性を見たことはないであらう。私は春のやうに明るい無邪清淨な快活な女性を好む。それと同時に、私は、彼女等が、浮薄な、皮相的な、膚淺低劣な、謂はゆる文化式現代生活の不快さから救はれることを希望しないではゐられない。そこには正しい女性自身の批判力が第一に働いて來なければならぬ。彼女を繞る生活樣式の一つ一つに對して、彼女は正しい批判力を働かせなければならぬ。眞に彼女自身を生かす爲に、正しい彼女自身の批判を見出さなければならぬ。

私は、日本人の模倣性の最も低劣な表現として、謂はゆる文化式な風潮を唾棄したくなる。文化は形のものではなく、寧ろ心のものでなければならぬ。無批判・無自覺の生活に批判を與へ、自覺を喚びさます所の生活こそ、それでなければならぬ。

女性は純潔でなければならぬ、春の光のやうに快活でなければならぬ。と同時に、四月の水が靜かに大地の底に浸潤するやうに、靜寂な凝念を魂の底に潜めて思惟しなければならぬ。強く明るく生きると共に、深く切に思惟する事の生活を求めなければならぬ。思惟する者の生活は決して幸福ではない。併しながら、思惟する事によつてのみ、人は刹那的な自身の生命と悠久とを結びつける事が出來る。思惟する事によつてのみ、人は生きる事の有難さ、生きる事の尊さ、生きる事の佗しさを知る。

笑ふ事によつて、踊る事によつて、歌ふ事によつて、人生の有難さを知る事の出來る人は幸福である。併しながら、日夜を思惟する事によつて、生きる事の有難さを知る者は更に惠まれてゐる。

私たちは生きて行く爲に、考へなければならぬ餘りに多くのものを持つてゐるはずである、自分自身に就いて、家庭に就いて、世の中に就いて。自分自身を眞に愛し育てて行く人は、必ず自分の家庭、更に世の中に就いて考へないではゐられないはずである。

小鳥のやうに快活であることは、女性として殊に好ましいことであるが、小鳥は巣に寄つて思ふ日を持つてゐる。思ふことを知らぬ小鳥は蔑まれなければならぬ。

女性自身を眞に美しくし深くする爲に、彼女は靜かに思惟するものの生活を持たなければならぬ。

加藤千蔭
號は芳宜園。國學者。江戸の人。文化五年(一八〇八)歿、年七十五。

笠にぬふてふ云々
「青柳を片糸によりて鶯のぬふてふ笠は梅の花笠。」
(古今集)

待たるゝものは
「あらたまの年たちかへるあしたより待たるゝものは鶯の聲。」
(素性法師、拾遺集)

三　初雁を聞く

加藤千蔭

桐の葉の一葉散りそむるゆふべ、獨り高き屋に登りて七つのを琴をかきならしつゝ、秋の風のことばをうそぶき出だせる折しも、遠つ人初雁がねの聲かすかにきこゆるにおどろきて、しばしひきさしつゝ見さくれば、姿は雲路になん消え失せぬる。いでや白雪のふるとしよりしも羽ならはしつゝ、かげろふの春立ちそむるあした、日影うら〳〵と打霞めるに、軒近き篁にねぐらしめつる鶯のまだ片なりなるうひごゑ、にほひ出だせるより、笠にぬふてふ花のかをりみてる枝に來ゐつゝ、ほこりかにさへづるはめでたきものから、雲にたぐへし櫻も散りすぎて、青葉しげき木の間を立ちぐく聲のむくつけきには、「待たるゝものは。」といひしに引きたがへてぞ覺ゆるかし。池の藤波夏かけて匂へる頃、ほとゝぎすのそれ

今一聲云々
「行きやらで山路くらしつ時鳥今一聲の聞かまほしさに。」
（源公忠、拾遺集）

みるめ

かあらぬかとたどらるゝ一聲より、花橘のゆくりなく香ににほへる曙、有明の月のさやかなるみ空に、さだかに名のりて過ぎゆくは更なり、小雨そぼふるゆふべ物おもひにいを寢ずして更けすぐる夜半に、をち返り鳴くを誰かあはれと思はざらん。しかはあれど、山かたつけるわたりにはこちたきまで飛びかひつゝ、梢にしもおりゐて高やかに鳴きとよめるなどは「今一聲の」といふべくもあらずうれたきや。

そも〳〵雁は常世の國をや出でけん、三越路よりや來ぬらん。或時は眞木たてる荒山のあしたの霧にむせび、或時はみるめ刈る八潮路のゆふべの浪をつばさにかけて、草の枕だに結びあへず。天路遙かに思ひあがりて、夕暮の雲の旗手に、聲は小舟こぐ唐櫓に通ひ、姿は薄墨にかける文字に似て、ひとつら過ぎゆきつゝをちかたの田づらに落ちくるさまさへおほどかにして、その時しも荻の

花を見すつる云々
「春霞立つを見すてゆく雁は花なき里にすみやならへる。」
（古今集）

芳宜園（はぎぞの）
加藤千蔭の號。

文化
光格・仁孝兩天皇の年號（一八〇四―一八一七）。

葉に音なふ風、萩が枝に亂るゝ露、隈なき夜半の月、染めかくる木々のもみぢ、千たび八千たび打ちすさぶ砧の音、おしこめてあはれなる折に逢ひぬるが限りなくめでたくなん。また別けていぬる春べには花を見すつるなど咎むめれど、しづけかるみ山の花をつばさにしめんとて、都の空を急ぐならんと思へば、そもはた憎からずこそ。雁よ、〳〵、なれこそはわが思ふどちなりけれ。

われもいざ秋をあはれぶ友どちの
つらには漏れじ天つかりがね　（うけらが花）

二三　芳宜園大人を祭る詞

村田春海

こゝに文化の五とせ九月八日、平春海謹みて、芳宜園の大人のおくつきの御前に、菊の初花一枝を手向け、香の木ひとひらをたきて、うなねつきて申さく。

縣居
賀茂眞淵の號。

あはれ、悲しきかも。君は我に十といひて一とせのこのかみにおはすなるが、今そのかみを思ひ出づるに、君はまさにさかりの齡におはして、我はまだ童にてぞ侍りける。常に縣居の庭に物學びに行きかひたる時、朝に參るとては、君の御佩刀（みはかし）のしりへに從ひ、夕べにまかるとては、君の御袖のもとに縋りて、相うるはしみまつれること、親子・はらからにも何か異ならん。ふみ讀むとては君を師とも尊み、歌作るとては我をおとゝえのつらにぞ教へ給ひける。中頃にして、君はつかへの道に暇なくおはし、我は世のさがにかゝづらひて、おのづから疎き方にも過ぎつるを、君つかへをしぞき給ひて後は、我も同じ衢に移り住めば、花を尋ぬとては我道しるべをなし、月を思ふとては君が舟に相乘り、憂きこともともに憂ひ、嬉しきふしもともに喜びて、世にありふる業のまめごともあだごとも、かたみに隔てなく心をかはせること今にはたとせ、その初を繰り返し數ふれば、相友たること既に五十とせにぞ餘りける。さるを今後れ奉りて、いつの世にか相見ん、いづれの時にか言問はん。常なきは人の身の習ぞと知るも、これをいかでか歎かざらん、かゝるを誰かはよく堪へん。

あはれ、悲しきかも。文の林世々に衰へ、言の葉の道日々に下り行けるを、賀茂の翁世に出で、今をすてて古にかへり、青雲のたかき心しらひを求め、しづはたのあやあるみやびごとを尊みいへれど、くひぜを守り、舟にきだつくるともがら、彼になづみこゝに引かれて、よくうけひく人なん稀なりしを、君一人心を起して、遍くさとし廣くいざなひしより、近き人はまのあたり相うづなひ、遠き人は遙かになびき來て、古ぶりの歌世に盛りになりにたるは、誠に君の力によりてなり。

その自ら詠み出でたまへる歌を見るに、舊きしらべ新しきすが

くひぜ云々
昔、宋に一農夫があつて、たまゝ兎が株にふれて死んだのを見て、耕作をやめ專ら株を守つてまた兎を得ようとして世の物笑となつた故事。（韓非子にある）

舟にきだつくる云云
呂氏春秋にある言葉「舟中から劍を墜し、刀でそのふなばたに刻んでここに劍が沈んだとて求め船の移つてゐるのを知らない」意。

藤原の御世　持統・文武の兩天皇の朝。
寧樂の御世　元明以後光仁に至る七朝。
堀河・鳥羽　第七十三代、第七十四代の天皇。この時後拾遺集・詞花集の撰があつた。

たとり〳〵に備はらざるはなし。その古をうつせるは、藤原・寧樂の御世に及び、後の巧に習へるは、堀河・鳥羽の御時に下らず。心に思ふことは口に盡くさざることなく、目に觸るゝものは詞に載せざることなんあらざりける。これを見て、高きも短きも愛で尊ばざる人なし。また事好みの人は、その名を君に知られては、身のおもて起しと思ひて世にも誇り、君の一歌を得ては、價なき寶にも換へじといひてぞ深く喜びける。

しかるを、今こがねの聲忽ち止みて、玉の響再び聞えずなりぬるは、わがどちの歎きのみかは、大方の世の人の憂ひともいひつべし。これをいかでか惜しまざらん、かゝるを誰かは慕はざらん。

あはれ、悲しきかも。我がかく言擧げするを、泉の下にもさやかにきこしめし、天かけりても遙かに見そなはせとなん申す。

（琴後集）

五十嵐力　文學博士。早稻田大學教授。國文學者。山形縣の人。明治七年生。
文武天皇　第四十二代。
宣命　純粹の我が國語を用ひて天皇の大命を宣傳するために用ひられた公文書。
古事記　三卷。神代より推古天皇の御代までの歷史。元明天皇の和銅五年（一七二）に太安麿の撰したもの。
日本紀　日本書紀。三十卷。神代より持統天皇までの事蹟を漢文で記した歷史。養老四年（一七二）舍人親王・太安麿等の勅を奉じて撰したもの。

二四　明・淨・直

五十嵐力

文武天皇が御即位の際に下された宣命の中に、左の詞がある。

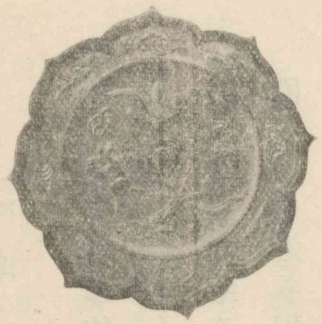
是を以て、百官人等、四方の食國を治めまつれと任け給へる國國の宰等に至るまでに、天皇が朝廷の敷かし給ひ、行ひ給へる國の法を、過ち犯すことなく、明き淨き直き誠の心もちていやすゝみ〳〵て緩怠ることなく務め結りて仕へまつれと詔り給ふ大命を諸聞食へと詔る。

我等は此の宣命にある、「明き」・「淨き」・「直き」心といふのが、日本人の性質中の核となり、中心となるものであらうと思ふ。此の語は代代の詔勅に幾度も〳〵繰り返されてゐる、しかも重きを置いて繰り返されてゐる。其の他、古事記・日本紀・萬葉集等に於て、重々しい場合に幾度も用ひられてゐる。これは畢竟、我等の祖先が心の中

萬葉集　二十卷。撰定年代及び撰者未詳。我が國最初の歌集。仁德天皇の頃から淳仁天皇の御宇に至るまで、約四百年間の和歌が收められてある。

に深く感じたこと、大和民族に最も濃く最も多量に賦與された性質が、自然に口を衝いて屢發したのではないか。世に大和民族の特性と稱せらるゝ現實・光明・活動・向上・中庸・快活・忠孝・清廉・勇武・義俠・風雅等の諸性質は、概ね此の明・淨・直の三大性を基本として說明されるらしく、殊には三種の神器が此の三大性の標章として遺憾なきやうに思はれる。

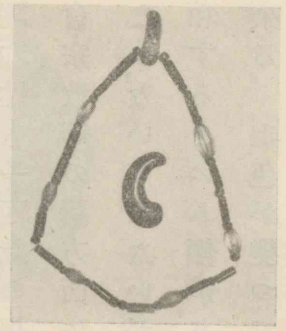
鏡の性は明、其の德は玲瓏透徹に物を映すにある。日本人は鏡のやうな明き心を以て正しく事物を觀た。故に其の見方は概して公平無私で、赤い物は赤いとし、黑い物は黑いとし、善行に對しては我を忘れて歎美し、惡行を見ては敢然として排斥するといふ傾があつた。天照大御神は「鏡を齋きて、我が大御前を見るが如くせよ。」と仰せられ


鏡

た。全國無數の神社には、其の鏡が神體として齋かれてある。詔勅や、祝詞や、君臣應對の詞などに「明き心」といふ語が澤山に用ひられてゐる。これ等はいづれも、此の性質が我が國民の心底に根深く植ゑつけられた證據になると思ふ。我が國民の中庸性・折衷性・調和性も一面此の根本性質の結果であらう。我が國には政治・社會・宗教等の諸方面に互つて、諸外國に見るが如き非常な大衝突がないないではないが、割合に少く、又いつもよい加減に切上げて調和するといふ傾がある。例へば、異主義が新たに外國から入つて來る。毛色が變つてゐるので、暫くは爭ふが、やがてお互に道理も無理もあることが解ると、馬鹿らしくて爭論が續けられなくなる。そこで騎虎の勢の意地喧嘩は止めにして、長短取捨の調停をする。萬事此の通りである。大和民族は、十字軍や佛蘭西革命の如き、極端な狂言を演ずるには餘りに心が明る過ぎる傾がある。我等は

日本人を「公正」といひ、「理に鋭し」といひ、「感情の平靜を保つ。」といひ、「日本人は何事をも受入るゝ胸懷洞然たる人種なり。」といふた外人の評が、決してでたらめの空世辭ではないと思ふ。

清淨の德は、玉に於て絶好の標章を得てゐる。淨と明とは似てはゐるが、同じくない。其の異ふ趣は、丁度鏡と玉との異ふ趣に似てゐる。汚穢・混濁を忌むことは、清・明ともに同樣であるが、清はそれ以上に味はひあり、溫かみあることを要する。例へば、鏡は空白にして正しく物を映ずれば足るが、玉は必ずしも空白物を映すを要とせずして、溫潤の光、圓融の相、澄徹の趣あることを要するが如きものである。本來日本人は明らかに事物を看る長所があるのみならず、外物を看るにも、自己を發表するにも、一種の味はひある態度を具へてゐ

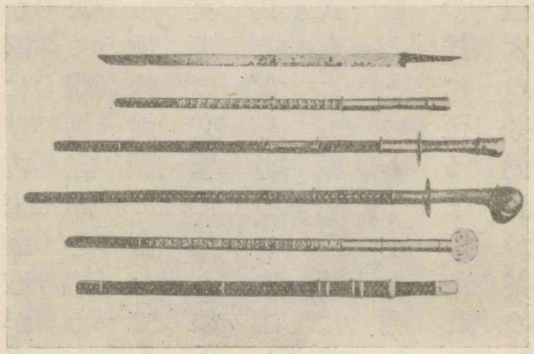


玉

花を翳し
一ノ谷の戰に於ける梶原景時の故事。
歌詠を贈答
源義家と安倍貞任の故事。
冑に香を
木村重成の故事。

た。其の明は空白の明ではなくして、溫潤・圓融・澄徹の趣味を加へた明である。硝子の明ではなくして、水晶・夜光珠の明である。我が國には古來禊・祓が多く行はれ、廣く用ひられ、且重要視されてゐた。祝詞・宣命を始めとして多くの歌詠・諷謠は、明き心を現しながら、趣味・風韻に富んでゐた。而も其の趣味や形容が、諸外國、例へば、支那の文學に見る如き、張子の虎のやうな誇張の弊がなくて、よく其の實を現し、中味にふさはしい修飾を纏うてゐる。むくつけき武人にも、戰陣の間に花を翳し、歌詠を贈答し、或は冑に香を焚きしめるといふやうな嗜みがあつた。上流社會はいふに及ばず、市井の民に至るまで、それ〴〵ふさはしい文學を有つてゐる。外國出稼ぎの勞働者が、其の日の生活に窮しながらも、猶一二の植木鉢を持たぬはなく、而してこれは外國の勞働者に絶えて見ぬ所といはれてゐる。大工・指物屋の手に成るはかなき家具や、細工物も、西洋

のが表面のみ美しく、裏面の粗末なのに反し、我が國のは見えぬ裏面まで手を盡くすといふ嗜みがあるといはれる。これ等は孰れも大和民族が清きを愛する根本性の現れたものではないか。我等は「日本人は世界一の審美眼を有する國民にして、貴族より勞働者に至るまで皆美術を愛翫す。」というた一外人の批評が、必ずしも虚妄でないと信ずる。



劍

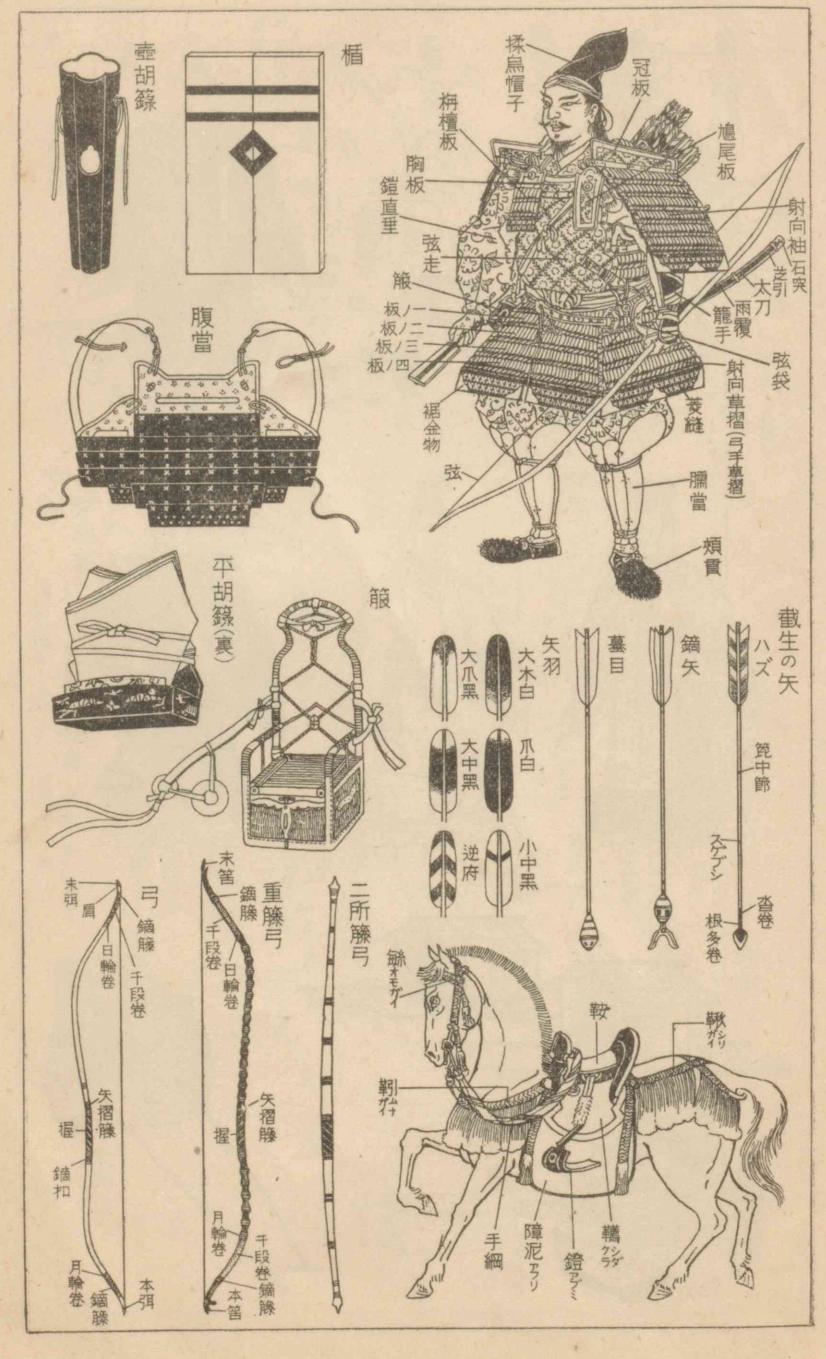
直は正を意味し、勇を意味し、決斷を意味し、直前直往を意味する。其の厭ふ所は、躊躇、緩慢、首鼠兩端である、曲ること、拗くふさはしい。元來直の德の本領は、心の明らかに見た所に向つること、邪なることである。叢雲の劍は其の標章として、此の上な

て直前するにある。若し右の三德を一括して、此を一體と見れば、明は其の靜的方面卽ち知の方面で、直は動的方面卽ち意の方面である。知の明らかに見たる所をば、意が直進して實現する、而して知の見方、意の働き方に潔くして言ひ知らぬ味はひのあるのが、邦人固有の性格ともいふべきであらう。明き心を以て「父母を見れば尊し、妻子見ればめぐしうつくし。」故に其の明き心の示す所に從ひ、直前して父母に事へ妻子を愛しむ。君を仰げば「八隅知し大君。」「現つ神。」として、國に臨み給ふさまが限りなく高く貴い、故に直前して「海行かば水漬く屍、山行かば草むす屍。」の獻身的奉公を效す。此の通りである。而して其の君父に事へ、妻子を愛するや、多くは水臭い思慮分別・利害勘定の結果ではなくして、直實掬すべき趣があつた。此處が眞淵・宣長等國學者が感歎し自負して措かなかつた所である。

（新國文學史）

父母を見れば云々
萬葉集、山上憶良の歌の句。

海行かば云々
「海行かば水漬く屍、山行かば草むす屍、大君のへにこそ死なめ、かへりみはせじ。」
（大伴家持、萬葉集）



新制女子國語讀本　卷七　終

内裡圖

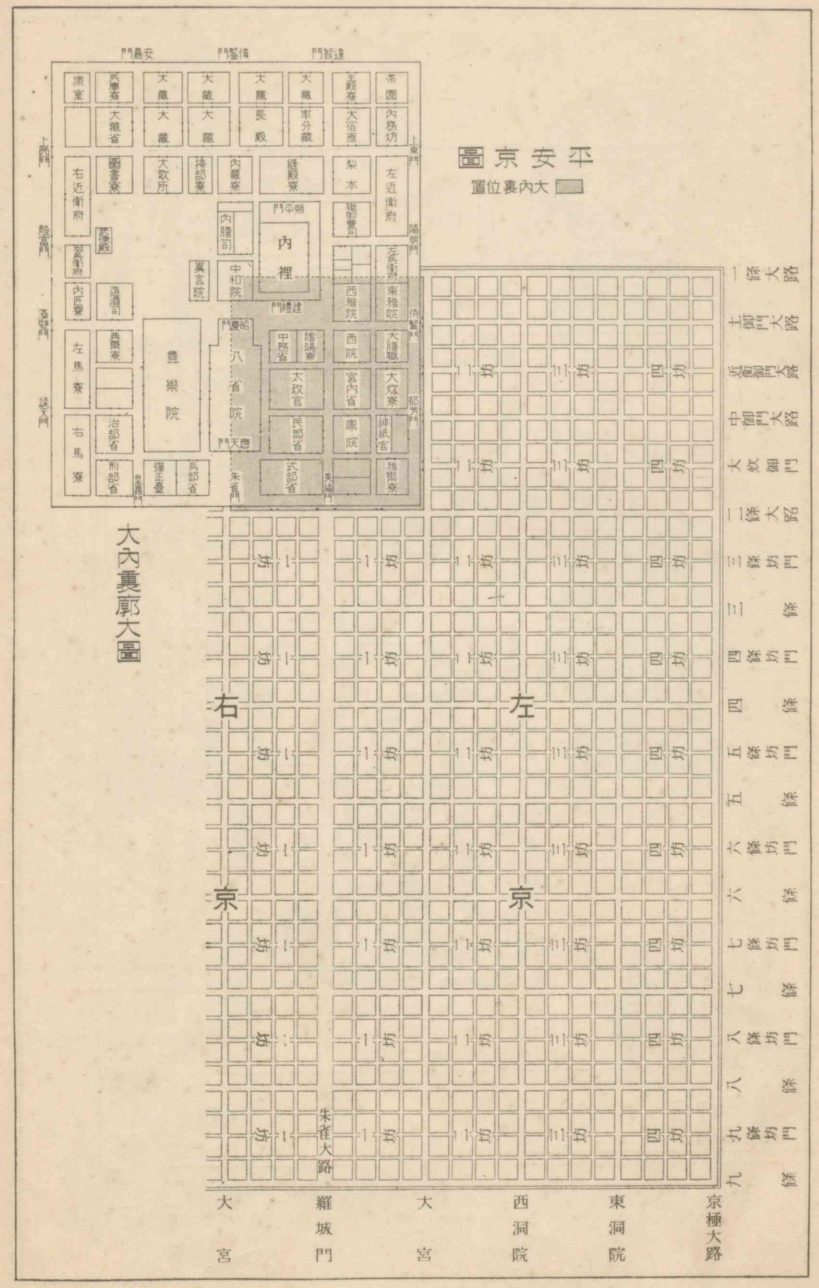
式乾門
伏舍
伏舍
朔平門
縫殿陣
北陣
蘭林坊
御書所画所
女賢所
樂所
桂芳坊
華芳坊
御殿
玄輝門
徽安門
安嘉門
衛兵所右佐
衛兵所左佐
桐在所未詳
舍北景淑
舍景淑（壺桐）
舍北陽昭
舍陽昭（壺梨）
宣耀殿
貞観殿（御匣殿）
常寧殿
麗景殿
登華殿
弘徽殿
舍芳藹（壺鳴雷）
萩
舍花凝（壺梅）
梅
梅
紅梅
白梅
舍香飛（壺藤）
遊義門
外遷物所
織宿
人頭所
打橋
波殿
納殿
後涼殿
清涼殿
墨廻所
陣
所書
内
陣脇
承香殿
仁寿殿
露壺
東中殿
紫宸殿
南殿
南階十八級
綾綺殿
温明殿
賢所
築垣
左兵衛督宿所
宣陽門（東帥左兵衛陣）
建春門（左衛門陣外記門）
侍従所
曹所
御書所
此ノ西方ニ宣秋門アリ（西陣右兵衛門）
陰明門（右兵衛陣）
右兵衛督宿所
右大将直廬
藏人所町屋
校書殿
弓場殿
月華門
日華門
宣陽殿
皇太子宿
左大臣直廬
内記所
延政門
武徳門
造物所
進物所
安福殿
春興殿
朱器殿
掃部内候
右廟門
左廟門
修理内候
僧房
中和門（右馬陣）
承明門
建礼門（南端門書馬陣）
長楽門
永安門
修明門
春華門
左馬陣
白馬陣
枇杷陣
伏舍
伏舍
伏舍
伏舍
伏舍
伏舍
伏舍

らむ	推量の助動詞	散るらむ。
	時の助動詞未來完了	生けらむ。
ね	打消の助動詞	人こそ知らね。
	完了の助動詞	とく行きね。

ばや	感動の助詞	知らじな。
	願望の助詞	心あらむ人に見せばや。
	條件と疑問の助詞	心あてに折らばや折らむ。

語

か	か弱し。か細し。
さ	さ夜。さ迷ふ。
ま	ま直中。ま心。
ひが	ひがめ。ひが事。



紛れ易き品詞（文語）

語	用法の種別	用例
たり	時の助動詞現在完了	花咲きたり。
	指定助動詞	父父たり、子子たり。
	形容動詞の語尾	水洋々たり。
なり	動詞	事業愈〻なりぬ。
	指定助動詞	彼は軍人なり。
		花の美しきなり。
		日はくるゝなり。
	詠歎の助動詞	蟲の聲すなり。
	形容動詞の語尾	山紫に水明らかなり。
らむ	推量の助動詞	散るらむ。
	時の助動詞未來完了	生けらむ。
ね	打消の助動詞	人こそ知らね。
	完了の助動詞	とく行きね。

語	用法の種別	用例
しか	過去の助動詞	斃るゝまでこそ戰ひしか。
	過去の助動詞と疑問の助詞	君はこの本をよみしか。
ぬ	完了の助動詞	花咲きぬ。
	打消の助動詞	こぬをまつ。
なむ	未來完了の助動詞	花咲きなむ。
	願望の助詞	花咲かなむ。
	係の助詞	花なむ咲く。
な	禁止の助詞	ゆめ忘るな。
	完了の助動詞	花散りなば。
	感動の助詞	知らじな。
ばや	願望の助詞	心あらむ人に見せばや。
	條件と疑問の助詞	心あてに折らばや折らむ。

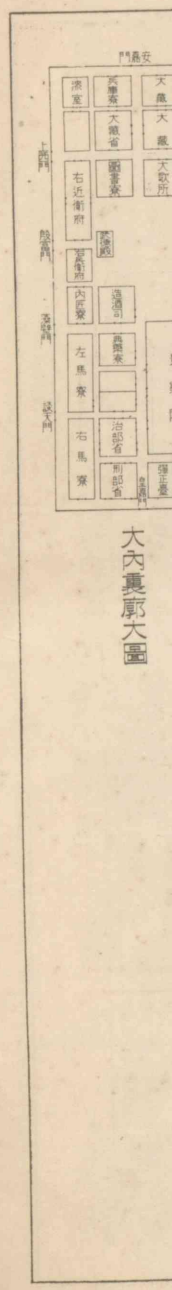
助詞の用法（文語）

語	用法の種別	用例
や	疑問	有りや無しや。

語	用法の種別	用例
ば	明日晴天ならば遠足せむ。

接頭語

語	用例
を	を川。を暗し。
初	うひ陣。うひ學び。
彌	彌高し。彌增す。
第	第一。第二。
た	た謀る。た走る。
け	けうとし。け壓る。
生	生紙。生藥。
もの	もの淋し。
いち	逸早し。
み	み吉野。み空。
お	お顏。
か	か弱し。か細し。
さ	さ夜。さ迷ふ。
ま	ま直中。ま心。
ひが	ひがめ。ひが事。
ほの	ほの見ゆ。ほの暗し。
ども	物ども。事ども。
ら	汝ら。我ら。
がた	君がた。殿がた。



紛れ易き品詞（文語）

語	用法の種別	用例
たり	時の助動詞 現在完了	花咲きたり。
	指定助動詞	父父たり、子子たり。
	形容動詞の語尾	水洋々たり。
なり	動詞	事業愈〻なりぬ。
	指定助動詞	彼は軍人なり。
		花の美しきなり。
		日はくるゝなり。
	詠歎の助動詞	蟲の聲すなり。
	形容動詞の語尾	山紫に水明らかなり。
らむ	推量の助動詞	散るらむ。
	時の助動詞 未來完了	生けらむ。
ね	打消の助動詞	人こそ知らね。
	完了の助動詞	とく行きね。

語	用法の種別	用例
しか	過去の助動詞と疑問の助詞	斃るゝまでこそ戰ひしか。
	過去の助動詞	君はこの本をよみしか。
ぬ	完了の助動詞	花咲きぬ。
	打消の助動詞	こぬをまつ。
なむ	未來完了の助動詞	花咲きなむ。
	願望の助詞	花咲かなむ。
	係の助詞	花なむ咲く。
な	禁止の助詞	ゆめ忘るな。
	完了の助動詞	花散りなば。
	感動の助詞	知らじな。
ばや	願望の助詞	心あらむ人に見せばや。
	條件と疑問の助詞	心あてに折らばや折らむ。

助詞の用法（文語）

用法の種別	助詞	用例
疑問	や	有りや無しや。
	か	有るか無きか。
反語	や	豈我のみならむや。
	か	唯か知らざらむ。
禁止	な	ゆめ忘るな。
	な…そ	我をな忘れそ。
		惡事をなせそ。
重きを言外に含ましむる	だに	思ふこと筆にだに殘さばや。
	すら	我身すら容れられず。
添加	さへ	梓弓おして春雨けふ降りぬあすさへ降らば若菜つみてむ。
場所・方向	に	机によりかゝる。
	へ	前へ進め。
願望	ばや	心あらむ人に見せばや。
	なむ	世の汚をば知らであらなむ。

用法の種別	助詞	用例
條件 假定	ば	明日晴天ならば遠足せむ。
		急かずばぬれざらまし。
	と ども	繪にかくと筆も及ばず。
		よろづよ經ども色はかはらじ。
條件 確定	ば	問へば答へ、問はざれば答へず。
		品よければ買ひぬ。
		波風止まねば同じところにあり。
	ど ども	美しけれどとげあり。
		見れども見えず。
係結	ぞ	見てぞ思ふ。
	や	花や散りし。
	か	いづれかまされる。
	なん	善くなむ見ゆる。
	こそ	人こそ見えね。

語	用法の種別	用例
接頭語	を	を川。を暗し。
	初	うひ陣。うひ學び。
	彌	彌高し。彌增す。
	第	第一。第二。
	た	た謀る。た走る。
	け	けうとし。け壓る。
	生	生紙。生藥。
	もの	もの淋し。
	いち	逸早し。
	み	み吉野。み空。
	お	お顏。
	か	か弱し。か細し。
	さ	さ夜。さ迷ふ。
	ま	ま直中。ま心。
	ひが	ひがめ。ひが事。
	ほの	ほの見ゆ。ほの暗し。

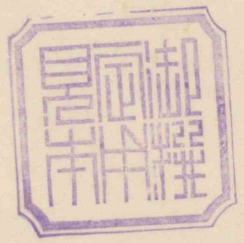
語	用法の種別	用例
接尾語	ども	物ども。事ども。
	ら	汝ら。我ら。
	がた	君がた。殿がた。
	たち	親たち。公だち。
	ばら	殿ばら。奴ばら。
	さま	神樣。
	へ	ゆくへ。片へ。
	さ	行くさ。歸るさ。
	み	青み。深み。
	げ	にくげ。心ありげ。
	めく	時めく。春めく。
	ばむ	けしきばむ。汗ばむ。
	さぶ	神さぶ。
	ぶる	學者ぶる。
	らし	男らし。女らし。
	がまし	をこがまし。隔てがまし。
	がてら	散歩がてら。

昭和十二年七月十九日　印刷
昭和十二年七月廿五日　發行
昭和十三年一月五日　修正再版印刷
昭和十三年一月十日　修正再版發行

新制女子國語讀本

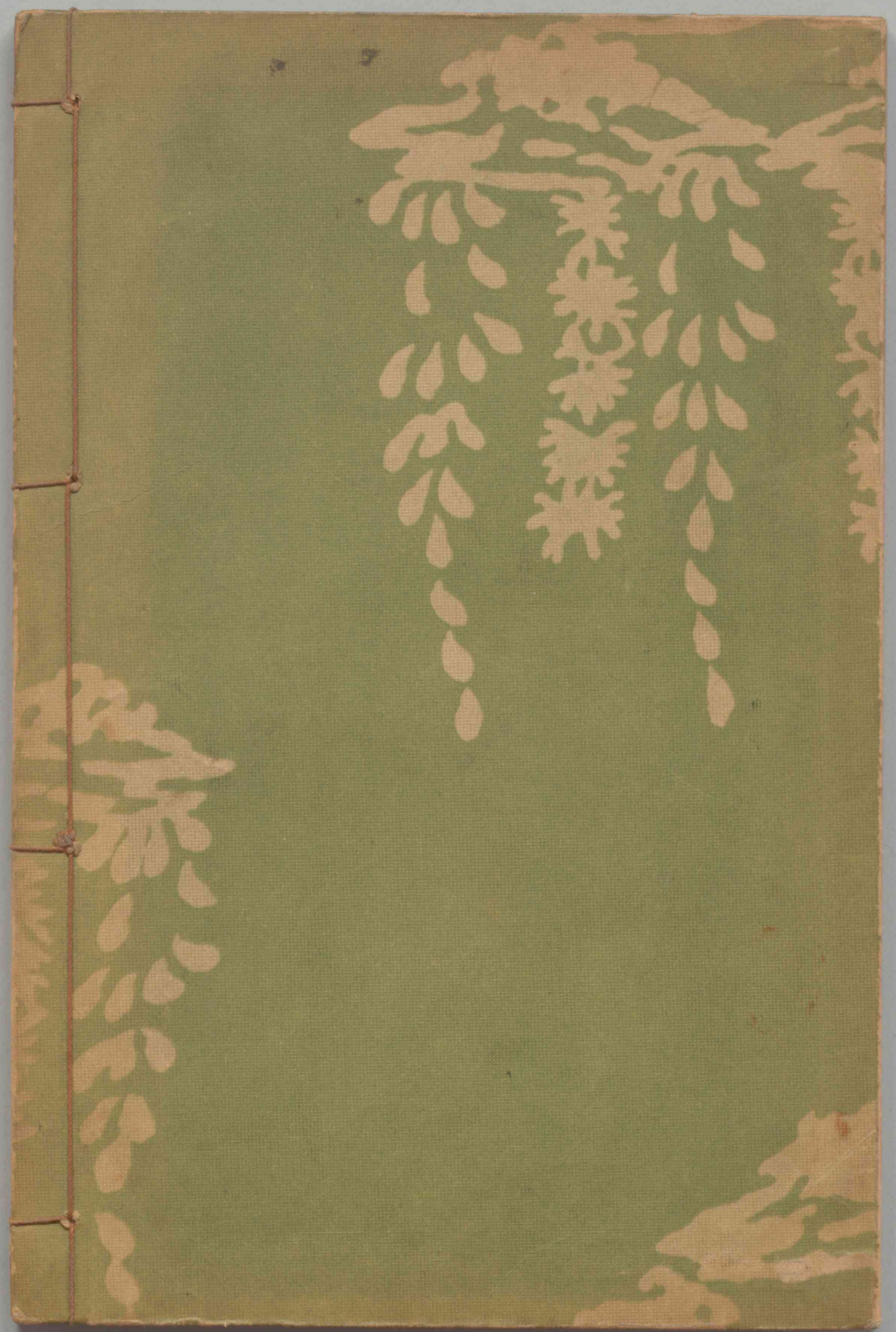
定價　卷一——卷九　各金六十錢
　　卷十　各金五十九錢

不許複製



編者　安藤正次
編者　東條操

發行者　東京市神田區神保町一丁目一番地
株式會社三省堂
代表者　龜井寅雄

印刷者　東京市蒲田區仲六鄉一丁目五番地
株式會社三省堂蒲田工場
代表者　龜井豐治

發行所　（東京市神田區神保町一丁目一番地）
振替東京三一五五五番　株式會社三省堂
（大阪市西區阿波座下通二丁目六番地）
振替大阪八一三〇〇番　株式會社三省堂大阪支店